

訳註　ヘーリアント（救世主）

〈第15歌章—第20歌章〉

石　川　光　庸

〈第15歌章　12使徒を選ぶ〉

このことを彼はこの世においてしばしば
多くの輝かしいわざを　行うことによって示した。
すなわち彼はみずから手で、　足萎えであろうと盲人であろうと、
その数多き人々を　さまざまな病から救ったのだ、
邪悪な仇敵たちが　人の子たちに投げかけた 1215
きわめて危険な、　未来永劫続く死の床への病、
そのような病気の数々から。　そこで人々の群れが
一日たりとも途絶えることなく、　我らの主が弟子たちとともに
居られるところへと押しかけたので、　さまざまな民族からなる
大群衆がそこに　集まることになった。 1220
とはいえ、皆が同じ信仰で　同じ心で
来たわけではない：　天帝の御子のもとに來た人々のある者は
貧乏人の一群で　——彼らには食べるものもなかったのだ——
この多勢の人々のもつて　食べものや飲みものを
もの乞いするのが目的だった。　というのも、心正しきもののふ、 1225
貧者に喜んで布施をする人たちが　そこにはたくさん
いたからである。　またある者たちはユダヤ族の人たちで、
心の曲った民族だった。　彼らがそこにやって來たのは
我らの主の　行為と言葉を待ち伏せて
陥れるためだった。　卑劣な思いを、 1230
邪悪な意図をもっていた：　支配者であるキリストから
人々を離反させ、　彼の教えを聞いたり、

心をそちらへ向けたりしないよう狙っていたのだ。 またある人々は賢明で、
 思慮にたけ、 神の愛顧にも値する
 より抜きの人々だった。 彼らがキリストの教えの場に來たのは、 1235
 キリストの聖なる言葉を聞き、 それを学び、
 かつ実行するためだった。 彼らは篤き信仰をもって
 固くキリストにとりすがっていた 彼らは賢き思いをもって
 主の従者となったのである。 それは「定めの日」が來たならば
 キリストが彼らを 最高の恩恵へ、すなわち神の王国へ 1240
 連れていってくれるのを望んだから。 実際キリストは
 人類の多くを受け入れて、 永く続く彼の庇護を
 約束し、 しかもその通りに立派に実現したのである。
 そこでこの名も高きキリストの周りに たいそうな数の
 人々が集まったのだ。 ありとあらゆる国々から、 1245
 どんな遠い道のりをもものともせず、 力強き人々の群が
 集まってくるのを彼は目にした。 彼の名声はかくもあまねく
 伝わっていたのである。 すると彼、人の子の中の最も権勢ある御方は
 人々の群からはなれて ひとり静かに座るために、
 力強きこの御方は、ある山に登った。 そしてみずから 1250
 牧としては十二人、 忠誠なる心正しき者たちを
 選び出した。 その後のすべての日々を
 主イエスは 彼らを弟子として
 常にみずからの側に 置いておきたいと望んだのである。
 そこで彼は次々と名を呼び、 自分の近くに來させた。 1255
 まず第一には アンデレとペトロの
 兄弟を、 次にまた二人、
 ヤコブとヨハネを。 この二人は神の心にかない、
 神は彼らに慈悲深かった。 彼らはその生まれから言う
 と父を同じくする息子同士だった。 神の御子はこの人々を 1260
 良き弟子として選び、 更にまた多くの者どもを、
 名高い男たちを選んだ： すなわちマタイとトマス、
 二人のユダと、 もうひとりのヤコブ、
 つまり御自身のいとこを。 キリストとこのヤコブは

二人の姉妹の血筋の ものであって、 1265
 良き親族であったのだ。 救世主キリストはこうして
 九人を数える男たち、 まっすぐな信仰の者たちを
 得たのである。 それからまた第十番目を選び出し、
 他の者たちに同行させた： その名はシモンと言った。
 また、異民族のバルトロマイを 山の上へ 1270
 おもむかせ、 また彼とともに忠誠の士ピリポをも
 行かせた。 かくしてこの十二人の
 勇士たちはそろって、 助言を与える御方の座しているところへ、
 あまたの人の庇護者のもとへ、 ひそかな語らいをなすためにおもむいた。
 この御方こそ全人類を 地獄への道から救い、 1275
 冥府の苦しみから助けようとしていたのだ。 たとえだれであれ、
 キリストがその偉大な叡智をもって 世の人に示そうと期している
 慈愛に満ちた教えを、 実行しようと望む人でさえあれば。

〔福音書その他の対応〕 1217 - 1220行は「マタイ」4章25節、1221 - 1241行は同節についてのHrabanusの註解、1241 - 1248行は1217 - 1220行の再説、1248 - 1254行は「マタイ」5章1節、「マルコ」3章13節、「ルカ」6章13節、1255 - 1272行は「ルカ」6章14節と15節、「マルコ」3章17節、Bedaの「ルカ」6章15節についての註解、1272 - 1278行は詩人の自由挿入。

〔Tatianとの対応〕 22章1 - 6節。

第15歌章 註解

1211) **that** : 1208行の接続詞**that**で導かれる文意を受ける。

1212) **than** : 従属接続詞「…のときに」(独als, 英when)。

1213) **halte** : *adj.* halt「足萎えの、跛行の」の名詞化、男性複数対格。ゴート語haltsをはじめ共ゲルマン的単語であるが語源未詳。おそらく「打つ」の意の印欧祖語*kel-/klā-の過去分詞に由来するか？ ドイツ語においては中高独語までhal₃があったがその後lahmにとつてかわられた。英語では現在までhaltが残っている。 **blinde** : *adj.* blind(英独ともblind)の名詞化、男性複数対格。印欧祖語*bhel-「キラキラ光る」に由来し、「まぶしい(ほど光る)」が原義かと思われる。「ポーッと光った、あいまいもことした」が原義という説もある。

1214) **lēfhēdi** : *stf.* lēf-hēd「病弱さ、病氣」の単数与格 *adj.* lēf「弱い、病氣の」は古英語、古フリジア語、古ザクセン語のいわゆる「北海ゲルマン語」に共通に登場するが、語源不詳。

1215) **suhtiu** : *stf.* suht 「病氣」(独 Sucht) の複数与格。 *adj.* siok 「病気の」(独 siech, 英 sick) から作られた名詞で、印欧祖語 *seng- 「悲しい、病んだ」に由来。高地ドイツ語ではこの系統の語は中世後期に krank にとってかわられた。 **sô** : 関係代名詞。 **allaro** : *adv.* 「すべての中で (最も…)」(独 aller-)。もともとは中性複数の (部分) 属格。613 行例と同じく、既に最上級を強める *adv.* として固定している。 **suâroston** : *adj.* swâr 「重い、困難な」(独 schwer) の最上級、女性複数対格。原義は「重量のある」だったが、既にゴート語 swers が「重要な、尊敬される」という比喩的意味を持っていることからわかるように、まもなく「困難な、つらい」という意味をも帯びるようになった。

1216) **barn** : 複数対格。M 写本では barnun。 **fiund** : 複数主格。 **biurpun** : *stv.* (III-2) bi-werpan 「投げつける」(独 [be-]werfen) の過去 3 人称複数。werpan はゴート語 wairpan を始めとして共ゲルマン的単語。

1217) **legar** : *stn.* legar 「病氣」の複数対格 印欧祖語 *legh- 「横たわる」(独 liegen, 英 to lie) に由来し、原義は「寝床」(独 Lager, 英 lair) で、比喩的に「死者の寝床→墓」や「人を寝床につかせる者→病氣」ともなった。

1218) **gehuuilikes** : 副詞的機能の属格 (601, 954 行に既出)

1220) **meginfolc** : *stn.* megin-folk 「大群衆」の主格 **managaro thiod** : 「さまざまな氏族の」。

1222) **sume … sie** : 「彼らのある者たちは」。不定代名詞 sum (英 some) は 496 行に既出。ここでは 3 人称代名詞と結び、英 some of them の意。sum it = 英 some of it.

1223) **âtes** : *stn.* ât 「食物」(独 Essen, 英 eat-ing) の属格 印欧祖語 *ad- 「食べる」に由来し、ラテン語 edere などと同根。 **tharf** : *stf.* 「欠乏、欠落; 必需 (品)」の主格 1187 行註を参照。

1224) **that** : 目的を示す従属接続詞。 **im** : 与格の再帰代名詞。 **mates** : 1054 行註を参照。次行 thiggian の属格目的語。 **drankes** : *stn.* drank 「飲みもの」(独 Trank, 英 drink) の属格。ゴート語 drigkan をはじめとして全ゲルマン共通語。

1225) **thigidin** : *swv.* thiggian 「乞う; もらう」の接続法過去、3 人称複数。印欧祖形は *tek- で「手をのばす」の意。「ある人にある物を乞う」を「at + 人 + 物の属格」で表わす。

1226) **alamosnie** : *stf.* alamôsna 「施物、喜捨」(独 Almosen, 英 alms) の単数対格。「同情、慈悲」の意のギリシャ語が教会ラテン語経由でゲルマン語に入ったもの。但し口語的に崩れた形で、つまり民衆語として採用された。

1227) **eft** : 「また一方では」。

1228) **fëgni** : *adj.* (fëkni と) 「まやかしの、裏切りの、邪悪な」の中性単数主格。現代ドイツ語には保持されていないが、英語では fake 「にせの」、fickle 「気まぐれな」に名残をとどめている。 **folcskepi** : *stn.* folk-skepi 「民衆; 民族、部族」(独 Volk-schaft) の単数主格。 **te**

thiu, that … : 独 *dafür, daß* …。

1230) **fāron** : *swv.* (属格目的語をとって)「待ち伏せする、危険な目に合わせる」。印欧祖語 **per-*「試みる、敢行する」に由来し、ラテン語 *peri-clum*「危険」や *ex-perimentum*「試み」などと同根。名詞 *fāra* はしたがって「(敵側の悪意ある) 試み」が原義であるが、中世初期には意味が狭くなり「たくらみ、待ち伏せ」となった。中世全体を通じて(古高独 *fāra*, 中高独 *vāre*)この「危険なたくらみ、待ち伏せ」が第一義であったが、次第に一般的な「危険」に意味の重点が移り、現代独の *Ge-fahr* に至る。独 *un-gefähr*「おおよそ」も原義は「たくらみのない、邪念のない」だった。英語では危険に対する恐れの方に意味が移って、今日の *fear* に至る。

1232) **alēdian** : *swv.* *a-lēdian*「…にとって…を不快なものとしさせる」(独 *ver-leiden*, 英 *make loathe*) の不定形。Crist は対格。

1233) **uuendin** : *swv.* *wendian* (独 *sich wenden*) の接続法過去 3 人称複数。

1234) **gode uuerde** : 「神にとって価値ある(人たち)」。

1235) **alesane** : *stv.* *a-lesan*「選び出す」(独 *er-lesen*) の過去分詞(複数主格)。 **im** : *kuman* にともなう与格の再帰代名詞。

1238) **gefangen** : この場合の *fāhan* は自動詞的で「…をつかもうと手をのはす; (しっかりと) とりつく、とりすがる」の意(独 *festhalten*)

1239) **thioduuelon** : *swm.* *thiod-welo*「最大の幸福、至福」の単数対格。

1240) **ēndagon** : *swm.* *ēn-dago*「死亡の日」の単数与格。古いゲルマンの法律用語で、支払いその他の義務履行に定められた「一日、一定の日」、すなわち「予定日」が原義。『ヘーリアント』作者は北欧や英語でよく用いられる法律語を「神によって定められた最後の日」、すなわち「死亡日」ないし「最後の審判の日」の意味で用いている。弱変化の *dago* という形は他には見られず、*ēn-dago* が古い由来の固定表現であることをうかがわせる。

★ 1221 行から 1243 行までは福音書には対応部がない。Hrabanus の「マタイ」4 章 25 節に対する註解が、イエスのもとに集まった群集を 4 種に分類しているので、これを参考にして補足したと思われる。1228 行前半部には、ユダヤ人はキリスト殺しの罪人という、初期キリスト教時代からすでにあり、この時代にはローマ・カトリックの公式見解として定着していたユダヤ人観が現われている。(ただし一般民衆の間の激しいユダヤ人憎悪は、十字軍以降である)。Murphy はこの箇所を、ザクセン族を弾圧するフランク族への反感の露呈したものと解釈している(43 頁)。

1242) **mundburd** : *stf.* *mund-burd*「庇護、保護」。語源については 378 行 *mund-boro*「庇護者、守り手」の解説を参照。「庇護を担うこと、請け負うこと」が原義。この語は *mundi-burdium* として中世ラテン語にも取り入れられ、古フランス語にも伝わった(*main-bournie*)。

1244) **megin** : *stn.*「多数、大群衆、軍勢」の主格。「力、能力」の意の *megin* (*mugan*, *maht* などと同系) は 841 行に既出。「力、能力」が「闘争力、勢力」を経て「大軍勢」、更に「大

群衆」の意味に至ったのは、**kraft**の場合と同じ。

1247) **lungro** : *adj.* **lungar**の複数属格。987行に既出。しかしM写本では**iungaro**となっている。

1250) **sundar** : *adv.* 「分離して」。ゴート語**sundro**をはじめとするケルマン共通単語。印欧祖語 **seni-/senu-*「分離」に由来し、独**be-sonders, sondern**などと同系。 **gesittien** : *stv.* **gisittian**「座る、着席する」の不定形。ここでは目的を示す(独**um…zu**, 英**in order to**)。

1251) **tuuelibi** : 数詞**twelif**の複数対格形。 **getalda** : *swv.* **gi-tellian**「数えあげる、決める」(独**(er-)zählen**, 英**to tell**)の過去分詞**gi-tald**の複数対格。「数えられた(選ばれた)者として」の意で**twelbi**の目的格補語。 **treuuafta** : *adj.* **treuhaft**「誠実な」(独**treu**, 英**true**)の複数対格。原義は「樹木、木材のようにまっすぐな、柁目に通っている」で、英**tree**と同根(131行に既出)。異教ゲルマン時代には主君に対する忠誠を表わしたが、キリスト教導入とともに「主キリストに対する純粋でまっすぐな信仰」に重点が移った。しかしこの箇所でもまだ主君への忠節というニュアンスは色濃い。

1252) **te iungoron** : **jungaro**は元来「若い者; 若い奉公人、下男、小姓」で、正確にはラテン語**discipulus**「学習者、生徒」や**apostolus**「使者」に対応しない。文字文化のなかったゲルマン人は、「生徒」に相当する概念をもたなかった(92行註参照)。

1254) **gesidskepea** : *stm.* **gi-sid-skepi**「従者団、共揃え、随行」の単数与格。異教ゲルマンの響きが強い。

1255) **nemnida** : *swv.* **nemnian**「名を呼ぶ; 名づける」(独**nennen**, 英**to name**)の過去単数。

1259) **he** : = **god**.

1264) **is selbes** : 「キリスト自身の」。 **suuiri** : *stm.* 「姉妹の子供; いとこ」の単数対格。**swestear**からの派生語。古英語、古スウェーデン語、古フリジア語、古ザクセン語のみに登場する。 **gisustruonion** : *npl.* **giswester**「姉妹」の与格。この語形はこの1例のみ。M写本は**swestron**となっていて問題がない。

★ アルバヨの子ヤコブが、キリストの母マリアの姉妹の子であるという説明は、Bedaの註解による。福音書にはその記述はない。

1265) **cnôsles** : 「同じ家の」の意で(**gi**)-**swestron**につく。 **cumana** : **kuman**の過去分詞、複数主格

1267) **niguni** : 基数**nigun**「9」(独**neun**, 英**nine**)の名詞的用法、対格。

1268) **tehandon** : 序数**tehando**「第10番目の」(独**zehnt**, 英**tenth**)の(弱変化)男性単数対格。

1271) **âdrum** : = **ôðarum**.

1273) **rûnu** : *stf.* **rûna**「(内輪の)話し合い、(秘密の)集会、相談」の単数与格。**gi-rûni**「神秘」として第3行に既出。ゴート語の**rûna**をはじめとして共ゲルマン的。「ひそひそと声をひそめて語る」意の擬音が発点らしく、そうだとするとラテン語の**rûmor**「物音、うわさ話」も同

根らしい。現代独 *raunen* 「ひそひそ話をする、ささやく」はこの名詞 *rûna* の直系子孫であるが、名詞 *Rune* 「ルーネ文字」は、17世紀以降ゲルマン古代学の発達とともに新たに取り入れられた学問語である。 *rādand* : *stv. rādan* (Ⅶ-2) 「助言する」(独 *raten*) の現在分詞、名詞的用法：「助言を与えてくれる人、長老、支配者」。イエス・キリストについてのみ用いられる。古英詩『ヘーオウルフ』でも神のことを *Rædend* としており(1555行)、アングロ・サクソン系の表現と思われる。*rādan* の語源(英 *to read* も同根)については226行註を参照。

1274) *allumu* : *adj. all* の中性単数与格(但しC写本は *allon*) 次行 *helpan* の与格目的語である *mancunnie* につく。

1275) *hellie* : *hellia* 「地獄」の属格。 *hellie gethwing* は945行に *helligitwing* として登場。

helpan : *stv.* (Ⅲ) 「救助する、助ける」(英 *to help*, 独 *helfen*)。与格目的語をとまう。

1276) *sô huum sô* : 「だれであれ…しようとする人に(力を貸そうと…)」。前行 *helpan* の与格目的語。 *frummian* の対格目的語が *lêra*

1277) *lioblîka* : *adj. liob-lîk* (独 *lieblich*) の女性単数対格。 *sô…lêra, sô…* : 後の *sô* は関係代名詞。

1278) *hogda* : < *huggian*。

★ 1272 - 1278行までは、1279行への導入的自由補足文。

〈第16歌章 山上の説教—真の八幸福〉

さてこの救い主キリストの まわりに弟子たちは
 寄り集まった。 主みずからが多くの人々の中から 1280
 選りすぐった者たちが。 この賢い男たちは
 神の御子のまわりに いそいそと集まった、
 志のある者たちが。 主の言葉を待ち望み、
 思いをこらして沈黙していた。 民衆の救い手、
 支配者である御方が どんな言葉によって 1285
 みんなのためになる何を 伝えようとしているのか
 切に知りたかったのだ。 さてそうして国土の牧者、
 神みずからの御子である方は みんなの前に座り、
 多くの賢い言葉を用いて、 どのようにしたらこの世において
 神を讃えるわざを なしとげることができるのか教えようとした。 1290
 彼はそこに座ったまま 黙って長いこと彼らを見つめた。

聖なる主の心は 彼らへの好意で満ち、
 おだやかな想いを抱いていた。 さて彼は遂に口を開いた。
 支配者の子息である御方は さまざまな言葉を用いて
 数多くのすばらしいことを教えたのである。 賢明な言葉を用いて 1295
 この男たちに、 すべてを支配するキリストが語ったのだ、
 ここにおけるこの説教のために 選び出したこの者たちに。
 すなわちいかなる者たちが あらゆる人々の中で、
 人間という種族の中で、 最も神に愛される者であるのかを。
 主は彼らに心をこめて語った： この現世である中つ国において 1300
 謙虚さの故に その心の中が貧しい人たちは
 幸いなのであると。 「彼らには永遠の国が、
 かくも神聖なる 不滅の生命が天国の沃野において
 約束されているのだから。」 また彼が言うには、心の柔和な人は
 幸いであると。 「彼らはこの榮えある地を、 1305
 上に述べたその国を所有できるのだから。」 また言うことには、
 自分の汚れた行いを嘆く者も幸いである： 「彼らは後に恩寵を、
 主の国において慰めを期待できるのだから。 また、この世において
 正しい裁きを下すことによって良き報いを欲する者も 幸いである。主の国で
 その賢き行為故に彼らは満たされるのだから。 そのような報いをこの勇士 1310
 たちは知ることができるのだ、 審理の場に座った時、他者をひそかに
 欺かず、正しい裁きを下す者たちは、 またこの世においてその
 胸の内が慈悲深い勇者たちも幸いである。 彼らには聖なる主君が、
 力ある御方みずからが慈悲深くして下さるのだから。 また多くの人の中で
 清い心を持つに至った人々も幸いである。 彼らは天国を支配される御方を 1315
 その国において見ることができるのだから。」 また言うことには、
 「人々の中で平和に生き、 いかなる闘争もせず、みずからのわざで訴訟沙汰を
 引きおこさぬ者も幸いである。 その人々は主の息子と呼ばれる。
 というのは主はそんな人に恵み深くして下さるのだから。 彼らは神の国を
 永く楽しむことができるのだ。」 また言うことには、 1320
 義を望み、 「そのために力ある人々から迫害と誹謗を受ける者も
 幸いである。 彼らには天において
 神の牧場と 霊としての生命が与えられる。

しかもそれは未来永劫そうなのであり、 彼らの至福の財産には
 終りということがないのである。」 このように支配者キリストは 1325
 ものふたちのために その数は8つにおける幸福を
 語ったのであった。 これらをもってすれば誰であれ常に
 天国をわがものにできるのである —— もしそれを望むならば ——、
 それともまた永遠に 富と喜びとを欠くことになるであろう、
 いつの日かこの世界に、 地上の生命の定めに別れを告げて、 1330
 他所の光を 尋ねることになる時。
 それが好ましいところとなるか、 つらい所となるかは、その人がこの世で
 この人々のあいだで何をしてきたかに依るのだが。 こんな言葉で
 すべての支配者たるキリストは、 王の中の最強の御方、
 神自身の御子は 弟子たちに語ったのだ。 1335
 「あなたたちもまた幸福になるでしょう」と彼は言った、 「なぜなら人々は
 この国の至るところで、 あなたたちを訴え、誹謗し、
 嘲り笑い、 そして多くの危害を加え、
 この世間において 悪事をあなたがたに企て、
 冒瀆の言葉と 敵意とを投げつけ、 1340
 あなたたちの教えを拒否し、 多くの迫害を
 あなたがたの主の故に、加えるからだ。 だからこそいつも
 あなたたちの心と生命を喜ばせておきなさい。 その報いはもう
 神の国に用意されているのだから。 どの善行に対してもたくさんの、
 何倍にもなった報酬が。 それがあなたたちへの褒美である、 1345
 あなたたちは以前の世で 苦難の道を歩み、
 この世の悪に悩まされたのだから。 他の者たちはつらい目に会い、
 冷厳な裁きが下されるだろう、 この地で財宝を持ち、
 大きな世俗の富を持てる者たちは。 彼らはこの世で喜びを浪費し、
 十分な楽しみにふけている。 彼らは彼岸に渡った後、 1350
 はるかに苦しい裁きを 受ける定めになっている。
 すると彼らは自分たちの惨めな状態を嘆き悲しむのだ、 この世では
 喜びに満ち、あらゆる楽しみを味わい、 不義不徳のすべてを、
 心のおもむくままの放縱三昧を、 悪行の数々を、何ひとつとして
 止めようとしないうこの者たちは。 彼らはそこで報いを受ける、 1355

苦しい災いがそれである。そして彼らは悩み苦しみつつ、報いを、
 身の破滅を見ることになるだろう。そこではじめて彼らの心は痛むのだ、
 この世かぎりの幸福ばかりを　あまりに多く求めたことに、
 胸の中で悔いるのだ。だがあなたたちは彼らの悪行を咎め、
 言葉をつくして喰いとめなさい、　今私がこうあなたたちに話しているように、 1360
 真心こめて、　私の仲間たちよ、正しき言葉をもって
 語りなさい。　今からあなたたちがこの世の
 塩となることができるように、　そして罪深い人々の
 悪行を正し、　その結果人々が良き事柄に
 身を転じ、　仇なす悪魔の策を、サタンの行為を 1365
 見捨てて、　主なる御方の国を探しもとめることができるように。
 だからあなたたちは、　多くの人を教えさとして
 私の教えに導くべきである　もしあなたたちの誰かが墮落して
 この為すべき教えに　背くとすれば、
 その人は、海の浜辺に　広くばらまかれた 1370
 塩も同然　何の役にも立つことはなく、
 ただ人の子がその足で　踏みにじるだけであらう、
 人々が砂浜で。　神の言葉をほかの人に知らせる義務のある者は
 このようになるのである：　もしみずからの心に疑念を生じさせ、
 そして清い思いとみずからの言葉をもって　人々を天の国へと 1375
 励ますことをせず、　神の言葉を語り告げる気をなくしてしまい、
 語る言葉も揺らいでしまうとすれば、　そのときは支配する主は、
 力強き御方は彼に対し怒りをいたくであらう。　そして人々もまた。
 すべての人間にとって、　人々にとって主は災いの主となるのである、
 もし主の教えが　何の役にも立たぬことになるなら。 1380

[福音書その他との対応] 1279 - 1280行は「マタイ」5章1節。1281 - 1290行は自由挿入文。1291 - 1299行も反復的敷衍。1300 - 1304行は同3節、1304 - 1306行は同4節、1306 - 1308行は同5節、1308 - 1312行は同6節、1312 - 1314行は同7節、1314 - 1316行は同8節、1316 - 1320行は同9節、1320 - 1325行は同10節、1325 - 1336行は以上のまとめである挿入文、1336 - 1342行は同11節および「ルカ」6章22節、1342 - 1345行は「マタイ」5章12節および「ルカ」6章23節、1347 - 1359行は「ルカ」6章24節、25節にもとづく補足、1359 - 1373行は「マタイ」5章13節、1373行以下はHrabanus。どの箇所もHrabanusの註解の影響が大きい、とりわけ1325行以下および1373行以下の要約的部分に顕著である。

[Tatianとの対応] 22章7節以降、23章、24章。

第16歌章 註解

1284) **thagodun** : *swv. thagon* 「沈黙する」の過去複数。ゴート語 *þahan*, 古ノルド語 *þagno*, 古高独語 *dagēn*, ラテン語 *tacere* などと同系。

1286) **sat im** : *sittian* は「関心の与格」の再帰代名詞をとまうことが多い(988行)。

1288) **spâhuuord** : *stn. spâh-word* 「賢い言葉」の複数対格。*spâh(i)* については125行註参照。

★ 1281 - 1290行までは自由補足。イエスが何を話そうとするのか、弟子たちの緊張した心境を表現しなかったのだろう。こことほとんど同じ文章が山上説教前半部が終わる1580行周辺に登場する。ひとつの山場の前後を明白にしようとの詩人の意志が読みとれよう。以下1299行までも反復的敷衍文である。

1291) **suuigoda** : *swv. swigon* 「沈黙する」(独 *schweigen*) の過去3人称単数。西ゲルマン共通語。ドイツ語では中世末期まで *dagen* (古ザクセン語 *thagon*, 1284行) と並立し、かつ弱変化だった。

★ イエスが「沈黙していた」とは福音書にはないが、「ルカ」6章20節の「そして目をあげ」や、「マタイ」5章2節の「口を開き」などから詩人が導き出した表現。

1293) **antlôc** : *stv. (II) ant-lûkan* 「(錠などを)開く」(♀ 英 *to lock*) の過去3人称単数。独 *Loch* 「穴」、*Lücke* 「すきま」、*Luke* 「小窓、明かりとり」などと同根。英 *lock* からわかるように *lûkan* は「閉ざす」が原義であるが、「閉ざされた場所→牢獄として用いられた洞穴→(小さい)穴、すきま、明かりとり」のように意味が移って *Loch* などに至った。

1295) **mârlîc** : *adj. mâr-lik* 「すばらしい、見事な」。*mâri* については269行に既述。

1296) **them** : 前行 *mannum* を指す代名詞。 **te theru sprâcu** : 「この演説のために」。

1298) **huuîlike** … : 1295行 *sagde* と結ぶ間接疑問文。 **uuârin** : 接続法。 **irminmanno** : *stn. irmin-man* 「(すべての)人、人間全体」の複数属格。一般性、普遍性を強調する *irmin-* については340行註を参照。

1300) **te sôdan** : 925行に既出。イエスが好んで用いる「まことに」(羅 *amen dico, autem*

dicoなど)の表現

★ **quad that** : この箇所から1325行まで山上説教の中でも最も重要な「真の八幸福」(真福八端)が語られるが、その中でquedanが5回、この**quad that**という主語を省略した形で(しかもthat以下に直説法と間接法を混ぜるという特別な技法で)用いられている。「マタイ」5章3節以下で8回繰り返されるBeati…「幸いなるかな」という印象強いラテン語構文を、その直訳たる Sâlige uuârin, Sâlige sind êc…などのみならず、quad thatの反復によっても聴衆の耳に刻みこもうとしたのであろう。「語る、告げる」は一般的には seggian, tellian, sprekanであり、quedanはquad heのように倒置の形で軽い挿入句として用いられるのが普通。主文において(しかも主語もなく)Quad that…と5回も繰り返すのはきわめて稀といってよく、聴衆の耳には新鮮に響いたことであろう。

1301) **middilgardun** : 弱変化例はこの1例のみ。ゴート語聖書から既に用いられてはいるが、この時代のザクセン大衆にはまだ古来の異教色の濃い言葉だったろう。

1302) **ôdmôdi** : 古高独語 diomuoti(独 Demut)とのニュアンスの差については376行註を参照。

★ 「ルカ」6章20節では単に「貧しい人々」(Beati pauperes)、「マタイ」5章3節では「心の貧しい人々」(Beati pauperes spiritu)となっており、Tatianも「マタイ」を直訳して Salige sint thie thar arme sint in geiste(22章8節)となっているのを、『ヘーリアント』詩人が「謙虚さの故に心の中が貧しい人々」と補足して訳しているのは、Hrabanusの「マタイ」註解にもとづいている。

1305) **mâdmundie** : *adj.* mād-mundi「心の柔和な」の複数主格。古高独語 mam-muntiとともにラテン語 mitis「柔和な」の翻訳語であるが、語源は必ずしも明らかにされていない。前半の mād-〔古高独 man-〕は現代独語 munter「元氣な」と同系で、「嬉しい」を原義とするゲルマン祖語 *manPa-に由来し、後半の-mundiは現代英語 mindと同系で、「思い、心、記憶」を原義とするゲルマン祖語 mundi- (印欧祖語 *men-)に由来するという説(Ilkow, 268頁)が有力である。ただ、これでは mād-mundi はほぼ「朗らかな、快活な」を表わすことになり、「柔和な」にはまだ距離がある。しかしこの1例しか登場しない mād-mundi とは異なって多くの使用例が見られる古高独語 mam-munti は、既にラテン語 mollis, lentus「柔かい、おだやかな」をも表わしており、したがってこの古高独語が『ヘーリアント』にも影響を与えたとも考えることも可能である。「朗らかさ、快活」がキリスト教的「柔和」と結びついたことは、逆に改宗以前のゲルマンの誇り高き英雄たちがおおむね暗鬱で寡黙がちであったことを示唆するのであろう。あるいはまた、改宗期のゲルマン人にとって許容できる範囲の「柔和」とは、「快活明朗であること」が限度であり、それ以上の柔和さは怯懦と見なされた、と言ってよいかもしれない。 **thie mârion erde** : 「この輝かしい地」、すなわち天国のこと。

1306) **ofsittien** : *stiv.*(V) of-sittian「所有する」の不定形。原義は「座りこんで奪取する」ことであろう(☞独 be-sitzen)。 **that selbe rîki** : 1302行の that êwaana rîki と「同じ国を」。

1307) **uuioþin** : *stv.*(VII-2) *wôþian* 「嘆き悲しむ」(英 *to weep*) の接続法過去。736 行に既出
uuammun : *adj.* *wam* 「罪深い」の弱変化女性複数対格。*wam* の語源は 742 行の *wam-skado* 「悪人」の註を参照。
uuillion : *swm.* *willio* 「望ましいこと、喜ばしいこと；恩寵」の単数対格。
gebîdan : *stv.*(I) *gi-bîdan* 「期待する；(期待したことを) 実際に体験する」の不定形。*bîdan* 「待つ；(待つために) 滞在する」(英 *to bide, abide*) に完了相化機能の接頭辞 *gi-* のついたもの。

1308) **frôfre** : 496 行に既出の *frôfra* 「救い、慰め」の単数対格。
frâhon : *swm.* *frâho* / *frôho* / *frôio* 「主君」の単数属格。この箇所はヴァティカン写本 (V 写本) から補ったもの。C 写本では *frofra an them selbon rikie*, M 写本では *frofro an iro rikia* となっていて、頭韻がひとつ不足する。

★ 自分の罪行を嘆く者は天国で慰めを得るという(「マタイ」にはない)補足も、主として Hrabanus の註解にもとづく。

the sie : 複数対格。次の *frumono* (*fruma* 「善行、良い報い」の複数属格) とともに非人称動詞 *gilustid* の目的語。*gilustian* は 1060 行に既出(人の対格と物の属格をとる)。

1309) **that** : 従属接続詞。前行 *frumono* の内容：「…という善行」。
adômien : *swv.* *a-dômien* 「裁く；振舞う」(英 *to doom*) の接続法現在、3 人称複数 語源は 490 行 *dôm* 註を参照。
Thes : 「それ故に」。

1310) **gîfullit** : 1308 行の *gilustian* 「切望する」に対応して、その望みが「満たされる」こと。
sulicoro … **frumono** : 動詞 *bi-knêgan* の属格目的語。
bicnêgan : *stv.*(VII-2) *bi-knêgan* 「知る；会得する」の不定形。属格目的語をとる。印欧祖語 **gnê-/gnô-* 「知る」に由来し、ラテン語 *nôscere* (< *gnôscere*) や英 *to know* と同根。従来「得る」という訳語を与えられてきたが、古英語 *be-cnâwan*, 古高独語 *bi-knâen* と同じく、素直に「知る」と解して問題はないであろう。
an rûnun : 「ひそかに」。原義は「密談において」。*rûnu* の語源は 3 行と 1273 行註に既述。
besuûican : 「たぶらかす」。1035 行に初出。

1312) **man** : 複数対格。前行 *besuûican* の目的語。
thar sie … **sittiad** : この *sie* は *thie rincos* および直前の *man* の双方を受ける。
mahle : *stn.* *mahal* 「裁判、民会、討論」の単数与格。既に 346 行の *hand-mahal* でも述べたように、*mahal* の原義は「公共の場」であつたらしい(ゴート語 *maþl* はギリシャ語 *agora* の訳語)。地名 *Det-mold* も「民衆の集会地、民会開催地」を意味した (< *Diet-malli*)。

★ 「マタイ」5 章 6 節の簡潔な文が 4 長行に拡張され、しかもゲルマン人に親しい民会の場に引き寄せて翻訳されている。この箇所は Hrabanus の註解に依存してはならず、『ヘーリアント』詩人の独創と思われる。「マタイ」では「義に飢えかわく人々」が主語であるのに、ここでは「審理の場」について、他者をひそかに欺かず公正に裁く人々は」となっていて、『ヘーリアント』の聴衆の少なからざる関心が民会という法廷の場にあったことを想起させる。「秘密裡にたぶらかして」
an rûnun besuûican という文などは、当時の民会法廷での実状をうかがわせるものであろう。

them : = the, them. いわゆる所有の与格 **mildi** : 30行註などで述べたように、ザクセン人聴衆がこの語を真にキリスト教的「慈悲」*misericors*として理解したかどうか、疑問である。特に「聖なる主君がお返しに *mildi* であって下さる」というのであれば、現世的な気前のよさとして受けとられた可能性も大であつたろう。

1314) **mahtig** : 名詞「力ある御方」。前行 *drohtin* の言いかえ。

1315) **gihrēnod** : *swv.* *hrēnon* 「清める」(独 *reinigen*) の過去分詞。878行 *hrēni* の註参照。「マタイ」5章8節では *mundo corde* 「心の清い人々」であるのを、「心を清らかにした」*hebbiad iro herta gihrēnod* と現在完了で表現しているのは、告解などのキリスト教徒としての義務を励行しているのだと *Murphy* は説く (46頁)。

1317) **fridusamo** : *adv.* 「友好的に、平和に」。**ēniga** : 「何らかの」。**fehta** : *stf.* 「争い、闘争」(英 *fight*, 独 *Ge-fecht*) の単数対格。印欧祖語 **pek-* 「(羊毛などを) むしる」に由来し、「髪をむしり合って争う」が原義と思われる。

1318) **saka** : 「訴訟、裁判沙汰」が原義であることは85行註に既述。ただしこれまでは *sundea* と結んで比喩的に「罪、罪惡」の意味で (85行、1009行)、あるいは本来の意味が薄れて単に「事柄」(1045行) として用いられたが、ここで始めて本来の法律用語として登場 **iro selboro** : 「自分みずからの」。*sia selbon* の複数属格。 *self* は弱変化が多いが、複数属格では強変化。**dādium** : *dād* の複数与格。**genemnide** : 過去分詞を複数主格 *adj.* として用いたもの。

1319) **genādīg** : *adj.* *gi-nādīg* 「慈悲深い」(独 *gnädig*)。ゴート語 *niðan* 「支持する、助ける」と同根で、古くから世俗的な「憐れみ深さ」の意に用いられた。しかし古ノルド語、古高独語、古低独語に類語は多く見られるのに、古英語には用例がない。700年頃からキリスト教的ラテン語 *gratia* の訳語として、とりわけアイルランド伝道団の影響下にあった南独地方で用いられた。

★ 1316 - 1320行は「マタイ」5章9節の「平和を作りだす人々は幸いである」に対応するが、尚武のザクセン族には最も納得の行かない真福であつたろう。1318行の「みずからのわざで訴訟沙汰を引きおこさぬ者」という、詩人による長たらしい付け加えは、前行にある「いかなる闘争も」に対する微量の条件緩和なのかもしれない。またここにおいても裁判用語 *saca* 「訴訟沙汰」が登場し、聴衆に身近な具体的争いごとを想起させていることも興味深い。

1321) **rehto** : *adv.* ではなく *stn.* *reht* 「正義」の複数属格。いわゆる「部分属格」。**tholod** : *swv.* *tholon* 「耐える、蒙る」(独 *dulden*) の語源は502行註を参照。

1322) **heti** : *stm.* 「敵意、憎しみ、迫害」(英 *hate*, 独 *Haß*) の単数対格。印欧祖語 **kād-* 「憎しみ」に由来するが、ゲルマン語では「(憎んで) 迫害する、追いつめる」というニュアンスが濃い (同語源の独 *hetzen* 「駆りたてる」を参照)。**harmquidi** : *stm.* *harm-quidi* 「悪口、誹謗」の単数対格。古英語では *hearm-cwide* およびその類語は頻出するのに、古高独語には稀な語なので、英国布教団系語彙のひとつであろう。

1323) **gēstlic** : *adj.* *gēst-lic* 「霊の、霊的な」。ラテン語 *spirituālis* の翻訳語。ドイツ語では

gêstのadj. は古来これのみであり、「霊的な；聖職者の」の双方の意味を持っていたが、近世になってあらたにgeistigが作られ、geistlichは「聖職者の」に限定されるようになった。

★ このgêstlicは福音書にもHrabanusにもなく、聴衆に誤解のないように配慮した詩人による補足。

1324) **is** : 次行welanを先取りしたもの。 **endi** : stn. 「終り」(独Ende, 英end) 印欧祖語*antios「横切った、向うの」に由来し、ギリシャ語anta-, anti-(独ant-, ent-)と同根。「向うにあるもの」が原義で、元来は場所に関してのみ用いられた。ゴート語、古英語、古ザクセン語まではm.であるが、古高・中高独語からn.が優勢となった。

1325) **uuelan** : swm. welo「財産、富」の単数属格。871行に既出。 **uunsames** : adj. wunsam「好ましい」の男性単数属格。語源は871行註を参照。C写本は最上級uunsamost。

★ 1320 - 1325行は「マタイ」5章10節、「義のために迫害される人々は幸いである」に対応する箇所であるが、フランク帝国の強権に屈服させられたザクセン族聴衆の心にしみ入るものがあっただろう(「力ある人々から迫害と誹謗を受ける者」)。天国における報いを語る言葉にも熱がこもっているようである。聖職者として聴衆のカロリング朝への憎しみを霊的に氷解させようという詩人の意図が感じられる。

1326) **ahto getalda** : 1251行、1267行に既出。「8であると教えあげられた→その数は8であるところの」。(gi)tellianの過去分詞のこの用法は慣用句となっている。 **ahto (getalda) sâlda** : 「真の八幸福、真福八端」。この用語はもちろん「マタイ」ではなくHrabanusの註解から取られた。

1328) **gehalon** : = halon(独holen)。「呼びかけて連れもどる」が原義で、独hallo!と同根であることについては302行註を参照。

1329) **tharbon** : swv. (物の属格とともに)「…を欠く」。169行のthurban「…の必要がある」、522行のthurftig「無一物の」、1187行のtharf「欠乏」などと同系。525行註参照。

1330) **sîdor** : 従属接続詞「…した後に」。

1331) **erdlîbigiscapu** : stn. pl. erd-lîbi-giscapu「地上の生命の定め、現世の命」の複数対格。死後の永遠の生命の反対概念で、完全にキリスト教的表現である。前半erd-lîf(i)はラテン語vita terraeのなぞりであろう。後半の-giscapuは127行、336行などに既出。この合成語は『ヘーリアント』に1度しか登場しない。

1332) **sô liof sô lêd, sô**… : はじめのsô…sô…は副詞、最後のsôは従属接続詞：「好ましきものであれ、つらいものであれ、…に応じて」(独sowohl…als auch…, je nachdem wie…)。liof-lêdはゲルマン語で好まれる頭韻対句：nē lēof nē lād(“Beowulf” 511行)。このliofとlêdは普通adj.の名詞化と解されているが、lioftにかかるadj.と見なすこともできる。 **mid** : 「…のあいだで」(独unter, 英among)。

1333) **giuuercod** : swv. gi-werkon「行う、為す」(独werken, wirken, 英to work)の直説法

現在、3人称単数。 **al sô** : 「このように」(独 also)。新しい文章の始まりと考えていい。

★ 1325 - 1336 行は、1300 行以下の内容を要約した自由補足文。

1336) **thes** : 従属接続詞「…であるゆえに」。476 行、969 行に既出 **biodat** : *stm.*(II) biodan 「告知する；提供する」(独 bieten, 英 to bid)の直説法3人称複数 **saka biodan**で「告訴する」の意。この動詞は印欧祖語 *bheudh-「目覚めている、目覚めさせる」に由来し、Buddha「仏陀←目覚めた人」と同系である。頻出する **gi-biodan**「命ずる」(独 gebieten) ももちろん biodan からの派生語である (134 行註参照)

1337) **aftar** : 与格支配の *präp.*「…の一带で、…の至るところで」。**theson** : = thesum(u)。 **lêd spreca**t : 「誹謗する」。

1338) **hosca** : *stm./n.* hosk 「嘲り、嘲笑」の単数与格 1083 行に hosk-word として既出。

1340) **felgiad** : *swv.* felgian 「…に…を課する」の現在3人称複数。語源ははっきりしないが、古高独語 felgan, 中高独語 velgen まで存続する。 **firin-sprâka** : *stf.* 「中傷、冒瀆的言辞」の単数対格 **firin** については28行註を参照。 **fiund-scepi** : *stm.* 「敵意」(独 Feind-schaft) の単数対格 **fiund** (独 Feind, 英 fiend) については28行註を参照。

1341) **lâgniad** : *swv.* lâgnian/lôgnian 「否定する」(独 leugnen) の現在3人称複数。おそらく「嘘をつく」(独 lügen, 英 to lie) と同根で、「隠れた」が原義か？

1342) **thurh** : 原因を示す。 **thes** : 次行 hward を先取りする。 **lâtad** : 命令形、2人称複数 目的語は hugi と lif。

1343) **an lustun** : 「喜ばしい」の意の慣用句 (1147 行に既出)。 **gôdo gehuulikes** : gôdo (名詞化：善行) は複数属格形 gehwilikes はさらに前行の lôn に結ぶ：「ありとあらゆる善行の報いが」。

1345) **mikil endi managfald** : 前々行 lôn にかかる *adj.* 中性単数主格 **manag-fald** 「多種の、何倍もの」(独 mannig-faltig, 英 many-fold) については1057 行 ên-fald の註を参照。 **te mêdu** : 「報酬として」。**mêdu** は *st./swf.* mêda の単数与格 印欧祖語 *mizdhó- に由来し、独 Miete 「賃貸、家賃」、英 (詩) meed 「報酬」に残る。 **arbid** : 「困難、苦行」(独 Arbeit) の語源は304 行註を参照。

1347) **uuir**s : *adv.(adj.)* (は wirsa) 「もっと悪く」(英 worse)。 **ubilo** (独 ubel) の不規則比較級。人の与格と wirs で「ある人にとってより悪しき状態である」意。ゴート語以来すべてのゲルマン語に見られる。おそらく「転倒させる、混乱させる」意のゲルマン語 *uers-iz 由来で、独 ver-wirren、英 war などとも同根であろう。

1348) **gibidig** : *adj.* 「与えられている」。80 行に既出。 **grimmora** : *adj.* grimm 「悲惨な、冷厳な、恐ろしい」(英 grim, 独 grimm[ig]) の比較級、中性単数主格 「ゴロゴロ、ドロドロ」という不気味な音が出発点らしく、*adj.* gram 「邪悪な」(独 gram)、901 行の **gramo** 「悪魔」などとも同系。 **thing** : 27 行、264 行などの註で既述の法律用語：「裁判、判決」。単数主格。

them : 前行 them ôdrun を指す代名詞。

1349) **uorolduuelon** : *swv.* werold-welo 「現世の富」の単数対格。ラテン語 *thesauros in terra, divitiae mundi* などをなぞったものであろう。この werold- という合成語は古英語にきわめて多く、英国伝道団の影響でドイツにも普及した。 **forslitat** : *stv.* (II) far-slitān 「裂く、割る; 消費する」(独 *verschleissen*)。1179 行に既出。 **uunnia** : *stf.* wunnia 「喜び」(独 *Wonne*) 単数対格。羅 *venus*, 独 *gewinnen*, 英 *to win*, 独 *Wunsch*, 英 *wish* などと同根で、「(獲物を) 求め多く」意の **uen-* が出発点。

1350) **geniudot** : *swv.* gi-niudon 「熱愛する、(楽しみに) ふける」。対格再帰代名詞(*sie*)と属格目的語(*genôges*)をとる。182 行に既出の *niud* 「切望、欲求」からの派生動詞。独 *niedlich*, *genießen*, *Nutz* などとも同根。 **genôges** : *adj.* gi-nôg(i) 「十分の、たっぷりした」(独 *genug*, 英 *enough*) の名詞的用法、中性単数属格。動詞 *giniudot* の目的語。印欧祖語 *(e)*nek-* 「到達する」に由来し、ゴート語 *ga-nôhs* 以後すべてのゲルマン語に存在する。 **narouuaro** : *adj.* *nar*u 「狭い; 苦しい」(英 *narrow*) の比較級、中性単数対格。ドイツ語では *Nehrung* 「砂州」、*Narbe* 「瘢痕」(細長い傷あとの形から) に名残りがあのみ。この箇所の *nar*u は比喩的に用いられており、独 *Angst* 「不安」が *adj. eng* 「狭い」の比喩的用法から派生したことを想起させる。この *thing* も「判決」の意。

1351) **hinferdi** : 1038 行註を参照。

1352) **uuôpian** : V 写本はこうになっているが、M 写本、C 写本では *uuôpiat*。 **uuanscefti** : *stf. pl.* *wan-skefti* 「悲惨さ、悲哀」の対格。*wan-* は 742 行、1050 行、1307 行既出の *wam* 「邪悪な」とは無関係で、「からの、欠落した」の意の印欧祖語 **uā-* に由来し、ラテン語 *vanus*, 英 *vain*, *to want*, ゴート語 *wans*, 独 *Wahn-sinn* 「狂気-欠落した理性」などと同系。古英語には「欠損、非…」を示す接頭後 *wan-* が頻出するが、『ヘーリアント』ではこの他には *wanon* 「(月が) 欠ける」(英 *to wane*, *want*)、*wan* 「欠けた」が各 1 例見られるのみ。 **sīn** : *wesan* の接統法。V 写本と C 写本では *sind*。

1353) **thes… uuiht** : 独 *nichts davon* に相当。 *thes* は次行の *mēngithâtio* と *thes, gilēstio* (すべて属格) を先取りしている指示代名詞。

1354) **thes sie an…** : 2 つの解釈が可能となる。 *thes* を独 *davon*, *das…* のような指示代名詞と関係代名詞の融合形と見る点は同じだが、一説によれば主語は *iro môd*, *an* は *adv.* で、丁度ドイツ語の分離前綴の如く *spenit* (< *spanen* 「誘引する」) と結ぶ: 「彼らの心が彼らをそこへ誘引するものごとの」。他説によれば主語は *thes* という語形に含まれている関係詞 *the*, または *that* で、*an* は *präp* : 「彼らをその心のもとに誘引するものごとの」(*Sievers*, 514 頁、*Sehrt*, 'spanen' の項、*Heyne*, *spanan* の項を参照)。ここでは前説(*Sievers*, *Sehrt*)を採用。

1356) **ubil** : *stn.* 「災い、不幸」(独 *Übel*, 英 *evil*)。ゴート語 *ubils* をはじめとして全ゲルマン共通語であるが、語源は未詳。適切な程度を「超えている」ことが原義で、*up/auf*, *over/über* な

どと同系か? **arbetsam** : *adj.* 「難儀な、骨の折れる」(Y 独 arbeit-sam 「勤勉な」)。 **is** : 前の **ubil** を受けるのではなく、やや漠然と「そういったことの(結果として)」ほどの意。
thane endi : 独 Ende が *n.* になったのは中高独語以降 (1324 行註参照)。

1357) **sorgondi** : *swv.* sorgon 「悩む」(英 to sorrow, Y 独 sorgen) の現在分詞、複数主格
sêr : *adj.* 「傷ついた、苦痛を感じる」。747 行に既出。主語は hugi。

1358) **thesero uueroldes** : 次の **uillean** と結ぶ単数属格。女性名詞 **werold** は特殊女性名詞 **naht** (属格 **nahtes**) や **burg** (**burg**es) などの影響で、女性のままで (**thesaro**) 属格語尾-es を持つ **uillean** : *swm.* willio 「恵み、喜ばしさ」の単数与格。 **fulgengun** : < **fulgangan** の過去3人称複数。

★ 1347 - 1359 行までの、現世を謳歌する富者たちの彼岸における苦しみについての描写は、部分的に「ルカ」6章24節にもとづくが、大部分は作者による自由な補足。

1359) **lahan** : 954 行既出。

1360) **uuearean** : *swv.* werian 「妨げる、阻止する」(独 wehren) の不定形。「囲んで守る」意の印欧祖語 *uer- に由来。ちなみに独 Bürger は元来「城市を守る人」の意(古英語 burg-ware, 古高独語 burg-ari) で、後半部がこの動詞の動作主名詞(nomen actionis)である。

1363) **salt** : *stn.* 「塩」(英 salt, 独 Salz)。 **sundigero** : *adj.* sundig 「罪深い」(独 sündig) の複数属格。

1364) **baludâdi** : *stf.* balu-dâd 「悪行」の複数対格。 **balu** (英 bale 「禍、不幸」) は 1096 行の **balu-wiso** 「悪に専くもの、サタン」に既出。

1365) **folc** : 前行 **sie** の同格説明語。 **farfâhan** : *stv.* (VII-1) far-fâhan 「…を(an)つかもうとする、…の方へ身を転じる」の接続法現在、3人称複数。 **fâhan** (独 fangen) は 288 行参照。次の **forlâtan**、次行の **sôkean** も接続法現在。

1366) **diubales** : *stn.* diubal 「悪魔、サタン」(英 devil, 独 Teufel) の単数属格。ギリシャ語系ラテン語 diabolus, diabolus (原義は「中傷する者」) をゲルマン語化したもの。数多い「悪魔」の呼称については 901 行の **gramo** の註を参照。

1367) **liudfolc** : *stn.* liud-folk 「人々」の単数(または複数)対格。 **liudio folk** は 561 行に既出。合成語 **liudifolk** はこの 1 例しか登場しない。

1368) **auuirdid** : *stv.* (III-2) a-werdan 「墮落する」の現在3人称単数。 **werdan** 「成る」に変化を表す前綴 a- (古英語 â-, 古高独語 ar-) のついたもの。この 1 例しか登場しない。

1370) **is im sô them salte** : 「彼にとって状況は塩にとつてと同様である」→「彼は塩も同然である」。 **bi sêes stade** : 頭韻のための句。福音書にはない。

1371) **teuuirpit** : *stv.* (III-2) te-werpan 「投げ散らす」(独 zer-werfen) の現在3人称単数。
dôg : 過去現在動詞 **dugan** 「役に立つ」(独 taugen) の現在3人称単数。独 tüchtig, Tugend などと同根。

1372) **fōtun** : 具格機能の与格。 **spurnat** : < *swv.* *spurnan* 「踏む、歩く」。英 *spur* 「拍車」、*to spurn* 「踏んづける」と同系。

1373) **greote** : *stn.* *griot* 「砂、砂利；穀粒」（独 *Grieß*, 英 *grit*）の単数与格

★ 「マタイ」5章13節「地の塩」のたとえは理解しづらい（「塩のききめがなくなる」とはどういうことか？）ので、詩人は *Hrabanus* を援用して、砂浜に投げすてられた塩は役に立たないというロジックに変えている。

1374) **im** : **he** の再帰代名詞与格。 **tuuehon** : *swv.* 「疑う、動揺する」（独 *zwei-feln*）名詞 *tweho* 「疑い」の派生動詞。数詞「2」**twê** に由来し、「是か非か、2つの間にためらう」のが原義。ほぼ同義の *twiflian*, *twifli* などについては287行註を参照。

1375) **that** : 「その結果」。

1376) **spanen** : 1031行註参照。

1377) **uuenkid** : < *swv.* *wenkian* 「逸脱する、不実な行いをする」（独 *wanken* 「動揺する」）。「…に関して」の意の属格目的語（*thero wordo*）をとともう。 **gram** : *adj.* 「…に敵意をもつ、恨む」（独 *gram*）。もともとは雷鳴などおどろおどろしい音の擬音。独 *Grimm* 「憤怒」、*Gram* 「心痛」、*Groll* 「恨み」や、901行既出の *gramo* 「邪悪なる者、悪魔」なども同根。

1378) **mahtig** : 前行の *waldand* の *Variation* : 「力強き御方」。 **môdag** : 前行 *gram* と同じく述語形容詞 : 「立腹した」。550行参照。 **sô samo** : 871行、1207行参照。

1379) **irminthiodun** : 複数与格。

1380) **alêdid** : 1232行既出の *swv.* *a-lêdian* 「…を…にとって不快なものとする」の過去分詞。**dugun** : 1371行既出 *dugan* の現在3人称複数。（但しC写本では *is lera ni dog* と単数になっている）。

★ 1373行以下では、福音書にあまりふさわしからぬ旧約的な「災いの主」が言及されている。墮落した信徒は教会から除かれねばならぬという *Hrabanus* 註解の一文を詩人が敷衍したものでしょう。

〈第17歌章 山上の説教（続き）〉

このように賢くも、 国土の守り手である御方は
神の言葉を伝え、 人々に教えさとしたのであった、
清らかな思いをもって。 もののふたちは
大きな喜びをもって 神の御子のまわりに立っていた、
熱心な人々は。 言葉のひとつも聞きのがさじと、

思いを凝らし口を閉じ、 人民すべての主である御方が
 神の法を人の子たちのために説くのに 耳を傾けていた。
 主は人々に天の国を約束し、 勇士たちにこう語った：
 「私の従者たちよ、 真実の言葉をもって私は
 あなたたちに言おう。 あなたたちはこれから 1390
 この世の、人の子たちの 光にならなければならない。
 多くの民を照らす 見事な、輝かしい
 喜ばしい光に。 あなたたちの大きな仕事は
 かくされてはならない、 どんな思いでそれを知らせるにしても。
 山の上にある町が、 高い岩山の上にある故に、 1395
 巨大なその建造物が 決してかくされないのと同様に、
 あなたたちの言葉は、 そしてあなたたちの行為も、
 この中つ国において すべての人々の目から
 かくされることはないのである。 私が教えるようにしなさい：
 あなたたちの光を 大きく人々に見せなさい、 1400
 人の子たちに。 それは彼らがあなたたちの心のうちを、
 あなたたちのわざと意思とを知るためであり、 また清らかな思いをもって
 支配者たる神を、 天の父を、彼が与えて下さった
 そのような教えの故に この世の光の中で讃美するためである。
 光をもっている者はだれであれ、 それを人々にかくしたり、 1405
 意固地に惜しんだりしてはならない。 高々と大広間にそれを
 かかけ置き、 その中にいる人のだれでもが、
 その部屋の人々の全員が ひとしなみにそれを見るように
 すべきなのである。 またこれと同じく、あなたたちは
 聖なる言葉をこの地において 人々に惜しんだり、 1410
 人類のだれにも、かくしてはならない。 あなたたちはそれを
 高くかかげて広め、 ありとあらゆる人がその神の命令を
 この地上の至るところにおいて 理解するだけでなく、
 実現もできるようにしなければならない。 かつての日々に
 きわめて賢い人々が その言葉でもって告げたそのように、 1415
 その頃はまだ古き律法を 人々は守っていたのだから、
 ——あなたたちに言うておくが—— 今となってはすべての者が

古き律法のもとで求められていたのよりは、なお一層しっかりと
神にお仕えすべきなのである。

あなたたちは決して思ってはならない、私がこの世に来たのは 1420

あの古き律法をこの世の人々の間で 混乱させたり

打ち倒したり、はたまたあの預言者たちの言葉を、

誠実きわまりないあの人たちが はっきり命令した言葉を

拒否するためだ、などとは。むしろまず先に天と地が、

今はひとつながりとなっている両者が、はらばらと崩壊するだろう、 1425

もしもかの預言者たちがこの地において 人々のために誠意をこめて

命じたあの言葉の何ひとつでも、この世界の光の中で

実現されずに残るといふことがあるとすれば。私はこの世に

彼らの言葉を廃しに来たのではなく、それらを成就させるために、

人の子たちの、この世の人々に良かれと、それらを増やし、 1430

新たなものと変えんがために来たのだ。これははるか昔から

古き律法に記されている。あなたたちは言葉に長じた人々が

よくこう言うのを聞いたではないか： この世のだれであれ、

他者の命を奪い、その人の生命を絶つことを

実行する者には、人の子たちによって死が 1435

与えられるということ。だが私は今それをあなたたちのために

もっと深く、もう一歩進めてこう言おう： だれであれ敵意をもって

他の人に対し心の中で、胸の中で

いきどおりを抱くものは —— 人は皆、同胞であり、

神の聖なる民として、一族たがいに固く団結し、 1440

親族であるのだから—— もしだれかが他の者に対して、

もしできることなら、その者の生命を断ってやりたいと

願うほどいきどおるとしたら、この人には既に有罪判決が下されており、

自分の腕力をもって 実際に他の者の首を切断した人と

まったく同じ判決を受けねばならぬ。すなわち自分の命をもって 1445

償わなければならないのだ。またこれも皆が知っているように、

真実の言葉をもって律法に書かれていることである： すなわち

自分の身に最も近い人を 心をこめて愛すべし、

自分の親族には恵み深くあり、血縁の一同には

善良であり、 氣前よく贈りものを与え、 1450
 味方ならだれをも愛すべしであると。 そして敵を憎み、
 渾身の力と敵意をもって 彼らに立ちむかい、
 悪しき者たちを防ぐべきであると。 だが私は今、本当に言うておく、
 この人々を前にしていっそう詳しく： あなたたちはこの仇敵を
 神の名において愛すべきなのである、 ちょうどあなたがたが同族の者たちを 1455
 愛するのとまったく同様に。 敵にたくさんの良きことをして上げなさい、
 清らかな心を敵に示してやりなさい、 心からの誠実さを、
 彼らの悪意のかわりにあなたがたの善意を。 たとえだれであれ
 敵に対して心を柔和に保つなら、 それはこの人にとって永遠の
 利得というべきものとなる。 そうすればあなたがたは 1460
 天帝の息子、 あの御方の輝かしい御子と呼ばれるという
 大きな報いを得ることができるのだ。 この世においては
 これにまさる報いを得ることはできない。 それからまた、あなたたち
 人の子のすべてに心から言うが、 あなたたちは心に怒りを抱いたままで
 神殿において 何らかの捧げ物を 1465
 支配する御方の前に、 きっと受納して下さるだろうなどと思って
 捧げてはならない、 心の中に敵意のかけらでも、
 他の人に対して 憎しみの念を抱いているかぎりは。
 そのようなときはまず最初に その訴訟の相手と仲直りをし、
 和解の言葉をかわしなさい。 それからはじめてあなたの貴い品々を 1470
 神の祭壇に捧げることができるのだ。 すると捧げ物はあの良き御方、
 天の帝にふさわしい物となる。 またあなたがたは[他の]ユダヤ人よりも
 もっと多く神の慈悲に应じて神にお仕えし、 もっと多く神の意志に従うべきである、
 もしあなたがたが 永遠の国を得ようと望み、
 永遠の生命を見ようと望むならば。 更にこれも言うておこう、 1475
 古き律法が それを命じているように、
 いかなる男子も 他人の妻を悪しき心をもって
 誘惑してはならないと。 だが私は本当にこうも言おう、
 人の目はその人を 暗黒の悪徳に導くことができるのだ、
 もし彼が心のおもむくままに 自分の気分を駆りたて、 1480
 わがものでもない女を 欲するとすれば。

そのとき、彼は既に 悪徳を犯したのであり、
 心の中で地獄の罰を しっかり結んでしまったのである。
 更にまた、もしひとつの目や 右の手が、
 あるいは身体の中のどの部分でも、 人を悪の道に誘おうとするなら、 1485
 ものふたちのだれにとっても、人の子のだれにとっても、
 その部分を捨ててしまう方が、 身体から切り取ってしまい、
 そんなものは持たずに 天の国に行く方が、
 五体満足のままで インフェルノに行くよりも、
 なにひとつ身体を損ねないままで 地獄の奥底への 1490
 道をたどるよりも、 はるかに良いことなのである。
 更にまた、 人間はもろいものであるから、よく心して
 友のだれかが彼をも 悪の道に引きこもうとしたら
 いかなる同族の者だとしても 決して従ってはならない。
 だれも決してそれほどまで 血族に縛られてはならず、 1495
 彼らの同族たることがそこまで強力であってはならない、 人殺しを、
 悪事を強制されるほどまで。 それよりはむしろ、
 そんな親族は身から遠ざけ、 親族としての交わりを断ち、
 いかなる愛情をも その人には持たず、
 自分ひとりが高い天の御国に 昇れるよう努める方がいい。 1500
 ふたりがそろって 地獄の苦しみを受け、大きな破滅の世界に落ちて
 ひどい苦悩を味わうよりは

【福音書その他との対応】 1381 - 1388 行は自由補足。1389 - 1399 行は「マタイ」5章14節、
 1399 - 1404 行は同16節、1405 - 1409 行は同15節（「マルコ」4章21節、「ルカ」11章33節など
 ども?）。1409 - 1419 行は同16節についての Hrabanus の註解、1420 - 1424 行は同17節、
 1424 - 1428 行は同18節、1428 - 1432 行は再び同17節、1432 - 1436 行は同21節、1436 -
 1446 行は同22節と Hrabanus の註解、1446 - 1453 行は同43節、1453 - 1458 行は同44節、
 1460 - 1462 行は同45節、1463 - 1472 行は同23節および24節、1472 - 1475 行は同20節、
 1475 - 1478 行は同27節、1478 - 1481 行は同28節、1484 - 1491 行は同29節および30節、
 1492 - 1503 行は29節についての Hrabanus 註解にもとづく。

【Tatian との対応】 25章、26章、27章。

第17歌章 註解

1385) **niud** : 182行註参照。

1387) **êu** : = êo 307行、529行註参照。

1388) **gihêt** : < gihêtan 「約束する」(独 *verheißen*)。

★ 1388行までは詩人の自由な補足。新しい重要な歌章を始めるにあたっての導入部分。

1390) **ford** : 「これから、今後」(独 *fortan*)。

1392) **fagar** : 前行 *lioht* を修飾して中性単数主格。 **mid firinun** : 「人々の間で」。

1394) **biholan** : < *stv.*(IV) *bi-helan* 「かくす」(独 *(ver)hehlen*)の過去分詞。 *helan* は636行に既出。 **mid huulilico** … **hugi** : 「どんな思いをもって…であろうと」。 *sea* は *iuaa uuerk* を指す。

1395) **than mêr the** … **ni** … : 「…よりその分だけ多くはなく→…と同様に…ではない」(独 *ebenso wenig wie*)。 *than* は元来は「そのときは」という時の副詞。 *the* は元来は無変化関係代名詞だが、ここでは比較の接続詞で英 *than*, 独 *als* の機能をもつ。この *than mêr the* + 否定は従属接続詞として副文を導き、1397行の主文章中の *than mêr* + 否定に対応する：「…でないのと同様に…でない」。

1396) **hôh holmklibu** : 「高い岩山」。*holmklibu* を *stn.* *holm-klif* の単数具格とする説(Heyne)と複数主格と見る説(Sehrt など)があるが、文脈からも文法上も具格が正しいと思われる(*an* は具格支配；福音書との対応箇所：*civitas* … *supra montem posta* 「山の上にある町」)。*holm* は「丘」が原義(ギリシャ語 *kolônós* 「丘」)で、現代北ドイツ語 *Holm* 「小島、小半島；中州」、スウェーデン語 *holme* 「小島」などに残る。英 *hill*、独 *Hügel* と同根。*klif*(英 *cliff*, 独 *Kliff, Klippe*)は現代英・独語とは異なって、海の岩礁や断崖である必要はなく、単なる岩山を指す。語源は「びったり貼りついて登る」(独 *kleben, klettern*, 英 *climb*)の意とする説と、「鋭く切り裂く」(英 *to cleave*, 独 *klieben, Kluft* など)の意とする説がある。

1397) **uurisilic** : *adj.* *wrisilik* 「巨大な、巨人の」(独 *riesen-haft*)。独 *Riese* 「巨人」の語源ははっきりしないが、「そびえる、起き上がる」意のゲルマン祖語 **rīsan*(英 *to rise, raise,独 reisen*)からという説が有力。

1399) **bidernit** : *swv.* *bi-dernian* 「かくす」(独 *tarnen*)の過去分詞。53行、1047行などに既出の *derni, darnungo* と同系(♀ *Tarn-kappe*)。

1402) **thes** : 「それ故に」。1404行の *thes* と呼応して「…なので(1404行)、それ故に(1402行)…」という副詞的機能の指示代名詞、中性単数属格。1404行の *thes* は接続詞。独 *deshalb* … *weil* …の *deshalb* に対応。

1406) **te hardo** : *Litotes* の例。320行、1093行参照。 **behuuelbean** : *swv.* *bi-hwelbian* 「おいおいかくす」。独 *wölben* 「アーチ形にする」、*Gewölbe* 「丸天井」と同源。

1407) **that** : 接続詞、独 *so daß* **thea** : 指示代名詞、複数主格、主語。

1408) **gelico** : *adv.* 「等しく」(独 *gleich*, 英 *a-like*)。

1409) **hallu** : *stf. halla* 「広間、ホール」(独 *Halle*, 英 *hall*) の単数与格。印欧祖語 *kel- 「かくれた」に由来し(独 *hehlen, hüllen*)、羅 *cella* 「部屋」とも同根。1407行の *seli* 「(主に宮廷の) 広間」(229行既出) の Variation。 **hald** : *adv.* 「より多く、もっと」。 *than hald ni* という形でのみ登場し、「それより以上多くはなく→同様に(少なくとも)」の意。既にゴート語においても *ni Þe haldis* 「その分より多くはなく→同様に決して…でない」という形で用いられている。語源のはっきりしていないこの比較級副詞(ゴート語 *haldis* の比較級語尾 *is* は古サクセン語や古高独語では消失)は、現在も南ドイツに *halt* 「とにかく、正に」として残っている。なおこの表現中の *than* 「それよりも」は1028行、1395行にも既出。

1411) **helidcunnie** : *stn. helid-kunni* 「人類」の単数与格。 *man-kunni* の Variation。 **hōho** : *brēdan* にかかる副詞としては不適当だが、1406行の *hōho* をくり返し、かつ頭韻語として採用された。 **far-helan** : *stv. (IV)* 「かくす」(独 *ver-hehlen*)。

1412) **brēdean** : *swv. brēdian* 「広がる；広める」(<独 *breit* 英 *broad*)。

1413) **farstanden** : 接続法。

1414) **gefrummien** : 接続法。 **forndagon** : *stm. pl. forn-/furn-dagos* 「以前の日々」の与格。常に *an forndagon* という形で用いられる。

1415) **tulgo uuiſe man** : 旧約の預言者たちのこと。

1417) **endi** : この後に1412行の接続詞 *that* が省略されていると考えてよい。 **sulicu** : 代名詞 *sulik* (独 *solch*, 英 *such*) の中性単数具格「その分だけ」(独 *um so*) - 「差額の具格」。 **suuidor** : *adv. swido* 「強く」の比較級。1419行の *than* と結ぶ。

1418) **thionioian** : = *thionon*。不定形。 *gehwilik* が主語なので *skal* などの助動詞が略されていると考えられる。

1419) **gebeode** : (C写本 *gibiede*) *stv. (II) gi-biodan* の自動詞的用法「命じられている、要求されている」の接続法現在。 *than* に始まる比較の従属文においては接続法が用いられるのが普通だが、しかし主文章が否定文のときは直説法が用いられる。内容的には過去のことであるのに接続法現在であるのはいわゆる「時の一致」による。

1420) **uuānīat** : 命令法、2人称複数。風格の目的語をとる(*thes*) **mit uuihtiu** : *wiht* の具格。C写本は与格で *mit uuihti*。 **bi thiu** : 「それ故に」。575行に *bithiu* として既出。次行 *that* 以下と結ぶ(独 *deswegen* … *weil* …)。 **quāmi** : 接続法過去。「時の一致」には反することになるが、主文の時より以前のことを接続法で表わすには接続法過去を用いるしかなかった。ラテン語や(後にその影響下に成立した)ドイツ語の接続法完了形は、古サクセン語、古高独語、古英語のいずれにもまだ存在していなかった。

1421) **irrien** : *swv. irrian* 「混乱させる、こわす」(独 *be-irren*) ラテン語 *errare* と同系(英 *error* は古仏語経由のこの系統)。ゴート語に既に見られるが『ヘーリアント』ではこの1例のみ。「マタイ」(5章17節)では… *solvere legem* であるが、*Tatian* (25章4節)では *euua zi losenne*,

Otfrid(Ⅱ, 18, 2)はwizzod firbrachiとなっている。Otfridや『ヘーリアント』作者には、Tatianで用いられたlosenはあまりにラテン語の直訳にすぎて真意から離れているように感じられ、それぞれ工夫してirranやfir-brechen(独zer-brechen)に至ったのだろう。『ヘーリアント』の場合には、頭韻の必要もあったことは当然である。

1422) **eftho** : 接続詞「または」。語源は27行註参照。 **forasagono** : *swm.* fora-sago「予言者、預言者」。ラテン語pro-phetaの直訳借用語。異教ゲルマンの予言者を示す*witega「知っている者」とはまったく別な、キリスト教一色の語を必要としたカロリング王朝期の造語。他に意識借用語wâr-sago「真実を語る者」があり、622行その他に既出。

1423) **uuidaruuerpen** : *stü.*(Ⅲ-2) widar-werpan「拒否する、はねつける」(独ver-werfen)。**thea** : 関係代名詞、中性複数対格 **thiu**は新形でM写本には見当らず、C写本から登場する。**giuuârea** : *adj.* giwâri「誠実な」の複数主格。名詞的に「誠実な者として」の意。

1424) **baralico** : *adv.* bar-liko「明らかに、はっきりと」。*adj.* bar「裸の」(独bar, 英bare)の*adv.* で、日本語の「菌に衣着せぬ」などに発想が近い。 **gebudun** : < gi-biodan。**scal** : 次の**bēdiu**が主語なので複数形sculanとなるべきだが、定動詞が主語より前に出る場合は時折単数形が用いられることがある。 **bēdiu** : 性の異なるhimilとerdeを指す中性複数。**tefaran** : *stü.*(Ⅵ)「分裂する、離れ離れになる」(独zerfahren)。

1425) **bihlidan** : 「包まれた状態で、ひとつに合して」。 *stü.* bi-hlidanの過去分詞、41行に既出。

1426) **êr than** … : 接続詞「…より以前に(むしろ)」。1424行の*adv.* êrと一体となった表現。比較文における接続法の使用については1419行gebeodeの註を参照。 **biliba** : *stü.*(Ⅰ) biliban「とどまる、…でありつづける」(独bleiben)の接続法現在3人称単数。印欧祖語*leip-/lip-「粘着する」に由来

1427) **unlêstid** : 「実現されぬままで」。 **thea** : 1423行のtheaと同じ。先行詞がthero wordo wihtであるから、厳密にはthat (= wiht), またはthiu (= thero wordo), または不変化詞theのいずれかであるべきところだが、古形のtheaを用いている。

1428) **te thiu** : te thiu that…「that…のそのことのために」(独dazu, daß…)。1420行のbi thiuと同じ。

1430) **ôkion** : *swv.*「増加させる、ふやす」。印欧祖語*aug-/yōg-「増える」に由来し、ラテン語augere, 独auch, wachsenなどと同根。2例のみ登場。 **nigean** : *swv.*「新たに作る、改新する」(< *adj.* niuwi = 独neu, 英new; 独er-neuern, 英to re-new)。C写本はniuuian。この1例のみ。

1431) **te frumu** : 「…の利益として、…のために」 *stf.* frumaの語源は52行註参照

★ 「マタイ」5章18節ではDonec transeat caelum et terra, iota unum aut unus apex non praeteribit ex lege, donec omnia fiat。「天地が減びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません」となっている。この「一点一画」(直訳すれば「ひとつのイオタ[= ι],

ひとつの点」]はここで単に *wiht* と翻案されていて (1426行)、少々ものたりないが、まだ文字文化になじんでいないザクセンの聴衆を相手とするには、こう訳すしかなく、そこで1428行以下のくり返しによって強調をねらったのだろう。

1434) **âdrana** : *ôdar* の男性単数対格。 **aldru** : *aldar* の単数具格 (奪格機能)。 **bineote** : *stu. (II) bi-niotan* 「…から(人の対格)…を (物の具格) 奪う」の接続法現在3人称単数 語源は224行註に既出。「欲する」が原義で、独 *Nutzen, genießen, Genosse* などと同根。

1435) **libu** : < *lif*。 **bilôsie** : < *bi-lôsian*。173行に既出(人の対格と物の属格をとる)。

1436) **adêlean** : *a-dêlian* 「(判決によって)分け与える、課する」(独 *er-teilen*, 英 *to deal*)。 **diopor** : *adv. diopo* 「深く」(英 *deep*, 独 *tief*) の比較級。

1437) **furdur** : *adv. ford* 「前方へ」の比較級。449行他に既出。ここでは「更に1歩を進めて、より完全に」ほどの意。 **bifâhan** : 「把握する」が原義だが、ここでは「まとめる、表現する」ほどの意。 **ina** : 再帰代名詞。

1439) **bilgit** : < *belgan*。723行註を参照。

1440) **bitengea** : *adj. bi-tengi* 「…と(与格: *sibbeon*) 一体となった、…と結合した」の複数主格 2例しかないこの語は古英語(*ge-tenge, tengan*)や古ノルド語(*bi-tengi, tengja*)の類語から判断すると、「ひしめく、肉迫する、密着する」などが原義らしい。

1441) **mâgskepi** : *stm. mág-skepi* 「親族、一族」の単数具格 (C写本では *mâgscepiu*)。 *mâg* の語源は785行 *môdar-mâg* の註を参照。-*skepi* については127行註参照。 **than** : = 独 *wenn*, 英 *if, when*。1443行の *than* に対応し、*wenn…than…* の構造。 **sô gram** : 次行の *libes uueldi* …と結んで「…したいほど、それほどの憎しみをいだくなら」。

1442) **libes…bilôsien** : 「生命を断つ」。属格目的語をとる *bilôsian* は173行に既出。

★ このあたりの戦闘的表現は原拠たる「マタイ」の簡素で静的文体と無縁であり、ゲルマン英雄詩の世界を彷彿とさせる。

1443) **afêhit** : *swv. a-fêhian* 「有罪判決を下す」の過去分詞。印欧祖語 **peik-* 「敵の」に由来し、独 *Fehde*, 英 *feud, foe* などと同系。「仇敵とみなす」が原義。この1例のみ。 **scolo** : *swm. skolo* 「債務者」(独 *Schuldner*)。属格 (*thes ferahas*) をともなって「死罪に価する」の意。助動詞 *skulan* (独 *sollen*, 英 *shall*) と同根。

1444) **salikes urdêlies** : 「同様の判決」。 *stm. ur-dêli* 「判決」(独 *Ur-teil*) の単数属格(前行 *sculo* と結ぶ)。ある決定を「分け与える」(独 *er-teilen*, 英 *to deal out*) が原義。きわめて古い法律用語で、独 *Urteil* の他、英 *ordeal* (古英語 *or-dāl*) 「神盟裁判、探湯 (くがたち)」に残る。 *sulik* は次の *sô* と結び「…と同様な」。 **sô the ôdar uuas** : *was* の後に *scolo* を補う。

1445) **hôbdo** : *hôbid* の単数具格。 *bilôsian* は属格の他に具格目的語をとることもある (奪格機能)。

1446) **erl** : 主語。 **ôdarna** : 対格目的語。

★ まだゲルマン的道德になじんでいる聴衆にキリスト教的兄弟愛を説くのは困難だったにちがいない。1436/1437行の「もっと深く、もっと進んで説いてあげよう」という文や、1439－1441行までの「すべての人類が神の民として親族であり、同族である」など、くどいくらいの補足文に作者の苦心がうかがわれる。血族関係を何よりも重視したゲルマン、とりわけザクセン族には有効な説得法であったろう。

1448) **nāhiston** : *adj.* nāhの最上級、男性単数対格、名詞化。

1449) **māgun** : *stm.* māg「親族」の複数与格 詳しくは785行註参照。 **gadulingun** : *gaduling*「同族」の複数与格。詳しくは221行註参照。

1450) **geba mildi** : 「贈り物に関して気前がいい」。gebaは属格。628行に既出の表現。

1451) **frāhon** : (C写本はfriehan) *swv.*「愛する」。語源については310行fri「夫人」の註を参照。 **hatan** : *swv.* haton「憎む」(英to hate, 独hassen)。1322行hetiの註を参照。

1453) **uurēdun** : *adj.* wrēd「怒った、敵の、邪悪な」の名詞化、男性複数与格。語源などは318行註参照。

1454) **fullicur** : *adv.* ful-liko「完全に」(独völlig, 英fully)の比較級。 **for thesumu folke** : 12弟子の他に大群衆がイエスと使徒たちの近くにいることを指すのだろう。

1455) **dōt** : 先行のminneonの代動詞：「自分の身内をそうするように」。現代英語の代動詞doに類似し、minnonが必要とする対格目的語をそのまま用いている。

1456) **an godes namon** : 889行にも既に登場している定型表現であるが、ザクセンの聴衆には新鮮に響いたかもしれない。「神の名において」とは「神の意志がそう命するように」ほどの意。

1458) **lêde** : *stn.* lēd「邪悪さ、悪意」の単数与格。liofの反意語。 **langsam rād** : 1202行に既出。rādは「利得、利益」の意。

1459) **sō huuilicumu, sō** : 308行に初出の関係文。「だれであれ…の人にとって」。 **is môd** : 対格。gefliitの目的語。 **te thiū** : 「この(目的の)ために」。

1460) **gefliit** : *stv.*(I) gi-flihan「整える、やわらげる」の現在3人称単数。語源未詳。主語は(manno gehwilik,) so…。

★ このあたり、「マタイ」5章43－45節「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし私はあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです」を踏まえており、キリスト教精神のエッセンスとも言うべき箇所である。いまだゲルマン的心情を濃厚に保っていたザクセン聴衆にはなかなか理解しがたい箇所であったろう。詩人は余分な理由づけはせず、ほぼ「マタイ」の文脈に沿っているが、ただし44節の「迫害する者のために祈りなさい」et orate pro persequentibus et calumniantibus vosだけは翻訳も翻案もしていない。自分を苦しめている敵のために祈る、という行為があまりに不可解として反撥を受けることを恐れたのかもしれない。「敵の悪意に対しては善意を示せ」tôgeat…/liof wiðar ira lêde (1458行) あ

たりが精一杯の翻案だったのだろう。

1464) **gibolgono** : < belgan: 723行註を参照。

1465) **gôdes** : 1344行、1456行の「善行」とは異なって物質的「財貨、富」の意。 **te godes hûsun** : 「神殿において」。

1466) **that it imu uuirdig si / te antfâhanne** : 「神 (= imu) がそれを受けとって下さるに備すると (期待して)」。antfâhanne は *stv. antfâhan* (独 *empfangen*) の動名詞与格形 (*Gerundium*)。

1467) **sô lango sô thu** : 1464行 *mid gibolgono hugi* の再説明。ここで突然 *gi* から *thu* に転じている。

1468) **inuuid** : *stn.in-wid* 「邪念、敵意、憎悪；奸策」の単数対格。ゴート語をはじめすべてのゲルマン語に同系の語彙が見られるが、語源ははっきりしない。あるいは *windan* 「曲りくねる」→「まっすぐでない、曲がった、ゆがんだ、不正な」となったものか？ **hugis** : < *huggian*。

1469) **thi** : *thû* の再帰的与格。 **gesônien** : *swv.gi-sônian* 「(wid …) …と和解する」(独 [*sich*]aus-/ver-söhnen; sühnen)。独・蘭にしか現われぬ法律用語で語源未詳。**sacualdand** : 現在分詞の名詞化 *sak-waldand* 「法律的争いの当事者」の単数対格。*saka* (独 *Sache*, 英 *sake*) の法的ニュアンスについては85行註参照。この1例しかなく、頭韻のための作者の新造語かもしれない。*Sachwalter* 「弁護士」という現代ドイツ語(ただし雅語)は中高独語からである。ここでは単に「敵」の意であって法律的色彩はあまりないとする意見もある(IIkow, 341頁)が、*gesônian* という法律用語との関連で用いられているのだから、無理であろう。

1470) **gemôdi** : *stn. gi-môdi* 「気持ちの一致；和解」の単数対格。「合致、統合」の意の接頭辞 *gi-* と、「気持ち、心、感情」の意の *môd* (独 *Mut*, 英 *mood*) の合成語。元来は *adj.* 「気持ちが一一致した」で(したがって *-môdi* という *adj.* 語尾)、後に名詞にも用いられるようになった。現代独 *Ge-müt* 「気分」は中高独語以降成立した語で、*gi-môdi* と直接の関係はないと言ってよい。**maht** : *mugan* の直説法現在2人称単数。

1471) **altere** : 外来語 *altari* 「祭壇」(羅 *altare*) の単数与格。85行とここと、2例しか登場しない。 **uuerde** : *adj. werd* (独 *wert*, 英 *worth[y]*) の複数主格。

★ 1463行から1472行までは、ほぼ「マタイ」5章23節、24節に対応するが、「マタイ」では争いの相手が *frater* 「兄弟」であるところを詩人は常に「他人」*ôðar man* や「訴訟の相手」*sakwaldand* で表現している。これは22節に対応する1436-1446行においても同じであった。血族を大切にするゲルマン的心情のサクセン聴衆に対して、*frater* の直訳 *brôðar* をこのようなネガティブな事例に用いるのはあまりにショックが大きいとして憚られたのであろうか？ 1439行から1441行にかけて、人はみな神の民として同胞であり、同族であることがわざわざ補足説明されていることから分かるように、*brôðar* や *gibrôðar* を比喩的に用いることに、サクセン聴衆はま

だ慣れていなかったのであろう。

1473) **ôdra** : C写本にはない。ここは「マタイ」5章22節「もしあなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に入れません。」に対応する。直訳的Tatianとは違って「律法学者」や「パリサイ人」を『ヘーリアント』詩人はいちいち翻訳せず、単に「ユダヤ人」としている。これらはおそらく多くのザクセン聴衆には耳遠い概念で、訳しても無益と判断したのだろう。またここにおけるôdraの有無は微妙である。ôdraがなければ比較の対象はユダヤ人一般となり、山上の説教を聞くイエスの弟子たちと心理的に一体化しつつあるかもしれないザクセン聴衆に反ユダヤ意識を植えつける効果があろう。これに対しôdraがあれば、客観的にイエスの弟子たちと一般ユダヤ人とが比較されているわけで、原拠の「マタイ」には一歩近いこととなろう。

1476) **gebiudid** : gi-biodanの自動詞的用法：「命じられている」。529行註参照。

1477) **ênig** … **ni** … : 「いかなる人も…でない」 (= 独 k-ein) **bisuuîca** : bi-swikan「誘惑する」の語源は1035行註を参照。

1478) **uuammu** : *stn. wam*「悪行、冒瀆」の単数具格。語源は742行 *wam-skado* の註を参照。

1479) **man** : 単数対格 **siuni** : *stn. siun*「視ること、視覚；眼」の複数主格 152行に既出。ôga「目」(独 *Auge*, 英 *eye*) という具体的名詞とはややニュアンスが異なるが、しかし152行と同じくむしろ頭韻上の必要によって用いられている。

1480) **ina** : 再帰の対格。spanenの目的語。 **is môd** : lâtîdの目的語。現代ドイツ語なら durch seinen Mut または von seinem Mut となるところ。

1481) **girnëan** : *swv. gîrnian*「強く欲する」(独 *be-gehren*, 英 *to yearn*) : 属格目的語「thero」を取る。「好んで」の *adv. gern(o)*(独 *gern*) の派生語。なお148行の gi-gîrnian「望んで得る」も参照。
gegangan : *stn. (VII-1) gi-gangan*「行き着く；帰着する、(人の与格とともに) …に帰属する」の不定形。完了相化の接頭辞 gi-の典型的用法のひとつ。現代ドイツ語 *zukommen* に対応する。

1482) **imu** : 再帰の与格。 **geuuarhta** : gi-wirkianの過去分詞、女性単数対格形 (*sundea* に呼応して)。

1483) **geheftid** : *swv. (gi-)heftian*「縛る、結びつける」(独 *heften*) の過去分詞。印欧祖語 **kap-*「つかむ」に由来し、羅 *capio*, 独 *heben, haben*, 英 *to have* などと同根。 **helliuuîti** : *stn. helli-wîti*「地獄(へ)の罰、却罰」の単数対格。wîtiの語源などは164行註参照。古高独語 Tatian の対応語 *helliwizi* と古英語の *helle-wite* は常に「ゲヘナ」の訳語であるが(IIklow, 190頁)、『ヘーリアント』において1例しかないこの語は、むしろ「地獄の苦しみ」と解すべきであろう。

★ ここは「マタイ」5章27節、28節に対応するが、しかし「姦淫する」*moechor* というギリシャ系ラテン語動詞の直訳はせず、*biswikan*「道ならぬ道に迷わせる、だます」で言い換えている。これに対し古高独語 Tatian は *fur-ligen*「不道徳に横たわる、寝る」、9世紀後半の Otfrid は *huoron* (英 *huren*「姦淫する、女郎買ひする」) という動詞を用いて直訳している。『ヘーリアン

ト」の詩人は、女性も多く含む上層階級のザクセン人聴衆に対して、控え目な表現を選んだのではなからうか。

1484) **suidare hand** : 185行に既出 語源は70行註参照

1486) **ôdar** : *adj.* ôdarの中性単数主格、名詞化、isの主語。次行that以下を先取りして「…という別方策の方がより好ましい」。

1487) **ina** : =lido hwilikan。 **fram** : *adv.* 「中から外へ、切り離して」(ヱ英from)。印欧祖語*pro-「前の」の最上級形に由来する。fremmian「成就する」と同系。 **uuerpa** : *stv.* (III-2) werpan「投げる」(独werfen)の接続法現在。

1488) **lichâmon** : *swm.* lik-hamo「身体、肉体；死体」(独Leichnam「死体」)の単数与格。154行に既出のlik「身体」と、「包むもの、カバー」の意のhamoとの合成語。したがってもともとは「身を包むもの」という詩的表現、一種のケニングであったと思われる。この例のように最初は肉体一般を指したが、徐々に「死体」に意味が傾き、現代独ではもっぱらとなっている(独Leichnamの-nはLeicheの弱変化語尾)。hamoは独Hemd「シャツ」に残り、またケルト語からラテン語に入ってcamisia「シャツ」、更にフランス語chemise, camisoleなどに至っている。

1489) **âno** : *prp.* (対格支配)「…なしで」(独ohne)。この例のように後置詞となることもある。否定のun-を根本とし、ラテン語sineなどと同系。

1490) **mid allun** : 「五体満足の状態で」。 **infern** : *stn.* 「地獄、インフェルノ」の単数与格。ラテン語infernusの借用形。hellia, infern, fernの使い分けなどについては898行、899行註を参照。

1491) **mid sô hêlun** : この後にlidunが略されている。 **helligrund** : *stm.* 「地獄の底」。ラテン語infernusが「深い所」を原義としていることから分かるように(inferus「低い」)、「地の底」に冥界があるという観念は、ユダヤ・キリスト教においてもゲルマン人と同様にきわめて古い。後には更にそれを強調するinferni abyssus「地獄の奥底」という表現も生じ、ゲルマン諸語においてもその翻訳がなされた。このhelligrundもその1例である。ここではとりわけ「マタイ」5章28節の「ゲヘナ」gehennaを訳したと考えてよいだろう。

1492) **mênid** : <mênian「意図する、望む」(独meinen, 英to mean)。主語はlêfhêd。lêfhêd : 「(病) 弱さ」。1214行に既出。

1493) **farfolgan** : *swv.* 「…に(与格) 従う」(独folgen, 英to follow)。 **he** : = friund。 **firina** : 「不義、悪行」の単数対格。語源などは28行註を参照。

1494) **suâs man** : 「(身内の、どんなに) 親しい人であれ」。主格で前行heの説明語。*adj.* swâsの語源は202行註を参照。 **an saca** : 前行のan firnaのVariation。sacaは複数対格「罪悪」。 **ne…eo…** : 「決して…ではない」(独n-ie, 英n-ever)。 **sî** : 要請的接続法。 **an sibbiun bilang** : 「一族という結びつきがある」。mid sibbeon bilangという形で64行に既出。詳しくは同所註を参照。

1496) **bêdid** : *swv.* *bédian* 「(人の対格、物の属格とともに)…に…を強いる」。ゴート語をはじめ全ケルマン共通語。ギリシャ語 *peithó* 「説得する」、ラテン語 *fidō* 「信頼する」と同根か？
baluuuerco : *stn.* *balu-werk* 「悪事」の複数属格。*balu-* 「破滅、罪惡」は1096行 *balo-wiso* 「破滅に導く者、惡魔」に既出。

1497) **fan imu** : 独 *von sich*. **fer** : *adv.* 「遠く (はなれて)」(英 *far*, 独 *fern*)。現代独の *fern* は「遠くから」が原義 (556行註参照)。**faruuerpa** : *stn.* (Ⅲ-2) *far-werpan* 「投げ出す、追いやる」の接続法現在。

1498) **mide** : *stn.* (Ⅰ) *mīdan* 「避ける」(独 *meiden*) の接続法現在。「取り替える」の意の印欧祖語 **meith-* に由来。この例のように属格の目的語を取ることが多い。**thar** … **tô** : 「その人に対して」。

1498) **that** : 目的接続詞。

1499) **he** … **êno** : 「ただ自分ひとりだけが」。*êno* は数詞 *ên* の弱変化、男性主格。弱変化は「ひとつだけ」(♀ 独 *all-ein*, 英 *al-one*) の意を強調する。または *adv.* と考えてもよい。
gestigan : *stn.* (Ⅰ) (gi-) *stigan* 「登る」(独 *steigen*)。原義は「歩く」で、独 *Steg* 「徒歩用の小橋；小径」、*Steig* 「歩道」などに残る。現代独の動詞 *steigen* も「歩いて上か、下かに行く」が根本義で、「登る」に限定されない。ここでは他動詞として *hō himilriki* という対格目的語を取っている (独 *besteigen*)。

1500) **hō(h)** : *adj.* 中性単数対格。**than** : 比較の接続詞。**helligethuing** : *stn.* *helligithwing* の単数対格。945行に既出。*thwing* には肉体的苦痛のニュアンスが濃い。

1501) **baluuuifti** : *stn.* *balu-witi* 「破滅的罪科；地獄の苦しみ」。*witi* の語源は164行註を参照。しかし *adj.* *brêd* との結合を考慮すれば、ここでは単に「地獄」を示しているらしい。**bêdea** : 主語 *sie* の補足。主人公と悪友の「双方」が。

1502) **ubil** : *adj.* 「ひどい、つらい」(独 *übel*)。名詞 *ubil* は1356行に既出。

★ 1492行以下は部分的に *Hrabanus* の註解をもとにしているが、大部分は『ヘーリアント』の詩人による自由な補足文。*friund*, *swās*, *sibbia*, *māg*, *māgskepi* などの血縁関係語彙を多用して、血の濃さよりも義による正しさの方が格段に重要であることを強調している。血族意識を至善とするゲルマン道徳になじんでいたザクセン聴衆には、驚くべき新しい教えであっただろう。

〈第18歌章 山上の説教 (続き)〉

これもまた律法に正しき言葉で書かれており、
 あなたたちが皆よく知っていることである。 すなわち

人はだれでも 偽証は避けねばならない、
 みずからを偽って宣誓してはならない。というのは、 それは大罪であり、 1505
 人々を不義の道へと 導くからである。
 だが私はふたたびあなたがたに言うておくが、 人の子はだれも決して
 たったひとつの誓いをも （法官の杖のもとで）立ててはならない。
 あの高い天にかけては。 なぜなら天は主の玉座だから。
 またその下の大地にかけても。 なぜなら大地は全能の御方の 1510
 美しい足おき台だから。 また人の子はだれも
 自分の頭にかけて誓ってもならない。 なぜならその髪の毛の一本も
 黒くも白くもできないのだから。 唯一、聖なる神、力ある神が
 そう命じられた場合を除いては。 だからもののふたる者は
 誓いの言葉を避けるべきである。 だれであれ誓いをしばしば行う者は 1515
 そうすることでかえって悪くなるのだ。 自分をおさえられないのだから。
 だから私は今あなたがたに 真実の言葉で命ずるのだ、
 これから私が心をこめて 私のこの言葉で教えるのよりも
 もっと重い誓約を、 もっと大きな誓言を
 人々に對し 誓ってはならない： 1520
 すなわち、もしだれかと訴訟沙汰になったら、 真実を言いなさい、
 「はい」と言うがいい、本当にそうなら。 真実を言い明かすがいい。
 もしそうでなければ「いいえ」と言うのだ、 それで満足するがいい。
 それを越えて 余分に行なわれることはどれもみな
 正しからぬ心から 世の人々のもとで生ずるものばかり。 1525
 その結果、勇士たちも いつわり多くして、他者の言葉を
 信じようとしなくなる。 それからまた、本当に言うておくが、
 古き律法では こう命じられている。すなわち、
 だれでも他の人の目を奪い、 その人の身体から
 取り去る者は、 またそれが身体のどの部分であるにせよ、 1530
 即刻われとわが身の 同じ身体の部分をもって
 償わなければならないと。 だが私は今、 こう教えよう、
 あなたたちはそのようにして 邪悪さに報復してはならない、
 あなたたちは慎ましい心をもって、 この世であなたたちに
 加えられるすべての苦難、 すべての不義に耐えなければならない。 1535

立派な人はだれでも 他の人々に対しては
 その人々の利益に、有利になるようはかるがいい、 もし自分自身も彼らから
 良き報酬をもらいたいと望むならば。 さすれば神は彼を、また
 そのように振る舞おうとするだれをも 寛大に扱って下さるのだ。
 貧しい人を助けなさい。 あなたがたの財宝を困っている人々に 1540
 分けてやりなさい。 そしてこのはかない世界においていかなる感謝も
 報いもらおうと思つてはならない。 ただ愛する御主君を思い、
 この力強く守り手が、 あなたがたが主に対する敬愛の念からする
 すべてのほどこしについて、 必ず御褒美を下さることを信じなさい。
 もしもあなたが貴顕の人上に 輝く金貨銀貨を用立て、 1545
 それでもっとたくさんの利を得ようと 思つておとしたら、
 いったいどうして神様から そんなことの報いや褒美を
 神様の世の光の中で受けることがあろう？ はかない室に過ぎぬからだ。
 あなたが他の人に対して、 言葉であれ行為であれ、
 同じ分だけ返してもらえると期待して、 やってやることは皆、 1550
 そんなものなのだ。 どうして私たちの主君があなたに感謝しようか、
 いつでも返してもらえるつもり、 あなたのそんな施し物に
 貧しい人々に対して 彼らがこの世では返してはくれない
 あなたの財宝を施し、 そして主の国土を求めるがいい、
 あなたがみずからの手をもって 貧しい人に喜捨を施すとき、 1555
 決して騒々しくやつてはならない。 謙虚な心をもって
 ただ神からの感謝を念じなさい。 そうすればあなたは報いを得る、
 とても嬉しい報酬を、 すばらしい恩賞を、あなたが必要とする
 限り永遠に得るのである。 あなたが篤信の心から密やかに
 施しをするなら、 それが何であれ私たちの主はお喜びになる。 1560
 決して施し物の前で声高に自慢してはならない。 だれでもそうだ、
 それはそんなむなしい自慢によって せつかくの施しが無残にも
 失われないためなのだ。 こうすればあなたは神の目の前で
 この良き行いに対する御褒美を いただくことになるだろう。
 私はあなたがたに命ずるが、 もしあなたがたが膝まづいて 1565
 主なる御方のお助けを、 あなたがたがこの世においてみずから
 作り出したあらゆる悪事と 犯罪と罪咎とからあなたがたを

救い出して下さるよう 乞い願おうとするならば、
 そのときは決して 他の人々の前でそれをやってはならない。
 多くの人々の前で声高にそれを知らせてはならない。 人がそれを 1570
 褒めたり、あなたの行為を高く評価したり、 そしてまた折角の
 主への祈りがむなしい虚栄の故に 失われてしまわないために。
 しかしあなたがたが、 勝利の主があなたがたの罪咎を許して下さるよう
 本当に謙虚に ——これこそ絶対に必要なことなのだが——
 心からそのお助けを 乞い願うのであれば、 1575
 それはきわめて密やかにやらねばならない。 あなたがたの主は、
 天の聖なる御方は それを分かって下さるのだ、言葉も業も
 何ひとつ主に隠されるものはないのだから。 あなたがたが膝まづいて
 清らかな心で祈りさえすれば、 主はすべてを望みのままに
 叶えて下さるのである。」 もののふたちは立ちつくしていた、 1580
 神の子息をとりかこんで、 心から耳を傾けつつ
 嬉しい気持ちにあふれて。 この言葉を一言も聞きもらすまいとし、
 真剣に考え沈黙していた。 この聖なる御子が
 その言葉を用いて はじめてこの世に伝えてくれた
 多くの輝かしいことについて、 さまざまに思いを練ることが 1585
 彼らには必要だったからである。 さて、それから十二人のうちのひとり、
 あの賢き者のひとりが 神の御子に向かってこう言った。

〔福音書その他との対応〕 1503 - 1506 行は「マタイ」5 章 33 節、1507 - 1511 行は同 34 節、
 1511 - 1514 行は同 36 節、1514 - 1527 行は同 37 節、および同 34、37 節についての Hrabanus
 註解、1527 - 1532 行は同 38 節、1532 - 1535 行は同 39 節、および同節についての Hrabanus
 註解、1536 - 1538 行は「ルカ」6 章 31 節、1538 - 1544 行は同じく「ルカ」6 章 35 節の一部、
 1545 - 1554 行は同 34 節、1555 - 1563 行は「マタイ」6 章 2 節と 1 節、1563 - 1564 行は同 4 節、
 1565 - 1572 行は同 5 節、1573 - 1580 行は同 6 節、1586 行以下次歌章の 1595 行までは「ルカ」
 11 章 1 節。

〔Tatian との対応〕 30 - 34 章。

第18歌章 註解

1504) **mênêdos** : *stm. mên-êd* 「偽証」(独 *Meineid*) の複数対格。84 行でふれた *mên* 「冒瀆、

不義」(英 *mean*) と、おそらくケルト系法律用語 *êd* 「宣誓」(独 *Eid*, 英 *oath*) との合成語。*êd* については以下の1508行註を参照。

1505) **forsuerie** : *stv.*(VI) *far-swerian* 「偽りの宣誓をする」の接続法現在。*swerian* (独 *schwören*, 英 *to swear*) の原義は「口に出して言う、話す；答える」で、英 *answer* (古英語 *andswarian*) に残る。この *far-swerian* は再帰動詞であるが、現代独の *sich verschwören* 「①結託する、②献身を心に誓う」と同義ではなく、「自分を偽って(*far-*)誓う」の意。 **te mikil** : *te* は *Litotes*

1507) **sân** : ここでは英 *soon* の意ではなく、「まったく、まことに」の意。 **suerea** : *stv.*(VI) *swerian* 「誓う、宣誓する」の接続法現在。前行で述べた原義にもかかわらず、既にゴート語 *swaran* ももっぱら法律の意味で用いられている。

1508) **êdstaf** : *stm.* *êd-staf* 「誓い、宣誓」の単数対格。1504行 *mêned* に既出の *êd* 「誓い」(独 *Eid*, 英 *oath*) の語源ははっきりしないが、ケルト系の借用語と考えられている(法律、国制方面ではケルト族が先進的であり、相当数のケルト系語彙がゲルマン語に取り入れられていることは、284行と1118行の *ambaht*-の項で既述)。後半部の *staf* 「棒、杖」(独 *Stab*, 英 *staff*) はここでは一種の接尾辞になっているが(古英語でも *ādstaef* は *ād* と同義に用いられている)、しかし本来は「裁判官の権威のシンボルとしての杖、司法杖」を指した。判決や宣誓の有効性は裁判官が手に持つ杖によって保証され、もし死刑判決の場合は被告の頭上でその杖を折った(そこから今日なお用いられる *den Stab über...brechen* 「交わりを断つ、絶交する」というドイツ語表現が生まれた)。したがって *êd-staf* は本来「宣誓に必要な司法杖」の意味であり、-*staf* はこの箇所のように接尾辞に近づいてはいても、なおかつ具体的なイメージを多分によびます語であったにちがいない。

1511) **fôtscamel** : *stm.* *fôt-skamel* 「足のせ台」(独 *Fuß-schemel*)。 *skamel* はラテン語 *scamillus* (または *scamellus* ; より古くは *scabellum*) 「小型のベンチ」から早くゲルマン諸語に借入された。この頃の王侯の椅子は高く、かつ床は冷たかったので、足のせ台は必需品であった(*Plkow*, 134頁)。

★ 「マタイ」5章ではこの後に「エルサレムをさして誓う云々」とあるが、詩人は聴衆に縁遠い地名の言及を避けている。原拠に忠実な *Tatian* (30章3節) とのこの相違は、『ヘーリアント』がまだキリスト教に詳しくない一般聴衆を対象とした語りものであるところから説明できるだろう。

1512) **suart** : *adj.* *swart* 「黒い」(独 *schwarz*, 英[古] *swart*) の中性単数対格。語源ははっきりしないが多分ラテン語 *sordes* 「汚れたもの」と同系。次行の *hâr* の補語。

1513) **hâr** : 「毛髪」(独 *Haar*, 英 *hair*)。単数対格。 **bûtan só** … : 「…を除いては」。536行に同じ構造が既出。

1514) **gemarcode** : 128行他に既出の *gimarkon* 「定める、決定する」の過去。 **filu** : *adv.*

「おおいに」とも、また次行の *ēduuordo* と結ぶ対格目的語とも解し得る。

1515) *ēduuordo* : *stn. ēd-word* 「誓い (の言葉)」の複数属格 (動詞 *midan* が属格支配のためとも、前行の代名詞 *filu* と結ぶためとも考えられる)。1508 行の *ēdu-staf* の影響下に作られた新造語。 *ēdu-staf* と違って他のケルマン語には対応形がない。

1516) *sô uuiridid is simbla uuirsa* : *sô* は前行の *sô hwe sô* という不定関係代名詞をうける指示代名詞：「だれであれ…であるその人は」。*is* : 人称代名詞、中性単数属格であるが副詞的に「その点において、それについては」の意。*uuirsa* : *adj. ubil* の不規則な比較級形「いっそう悪い」(英 *worse*)。語源は 1347 行の *wirs* の項を参照。*giuuardon* : 与格の再帰代名詞 (*imu*) をともなうこの動詞については 300 行註を参照。

1519) *méron* : *adj. mikil* の不規則比較級 *mêro* 「より大きな」の男性複数対格。*bûtan so* … : ここでは先行の比較級 *swidoron êdos, mêron (êdos)* と結んでほとんど「…よりも」ほどの意となる。

1520) *suuido uuârlico* : 挿入副詞。

1521) *huuemu saca sôkea* : 「ある人に訴訟を仕かける」。法律表現。*saca* と *sôkian* は同根で、ほとんど同義反復となる (85 行、1318 行の註を参照)。*biseggea* : *swv. bi-seggian* 「言う」(独 *sagen*, 英 *to say*) の接続法現在、*man* を主語として 3 人称単数。*that uuâre* : *adj. wâr* 「本当の」(独 *wahr*) の名詞化、中性単数対格。

1522) *iâ* : 間投詞 *jâ* 「はい、然り」(独 *ja*, 英 *yea*)。(英 *yes* は *yea* と *so* の結合したもので、多く誓約の言葉が続いた)。*gef* : = *ef*。*geha* : 547 行に既出の *gehan* 「言う」の接続法現在。属格の目的語(*thes*)をとる。

1523) *nên* : 間投詞「いいえ、否」(独 *nein*, 英 *none*) 否定辞 *neo, nie* に数詞 *ên* の中性形のついたもの。だから原義は「ひとつとして…ない」という強意。*af* : = *ef*。*lâta* : 接続法現在。*genôg* を対格目的語としてとっている。*im* : 再帰代名詞与格 (独 *sich*)。*genôg* : 中性単数名詞として用いられている：「十分さ、満足」。*an thiû* : 「その点については」。前置詞 *an* が与格をとる唯一の結合である。

1524) *sô huat sô is mêr obar that* : 「何ごとであれ、それを越えて (*obar that*)、余分なこと (*is mêr*) を」。*is (< it)* は名詞的な *mêr* につく部分属格「その余分さ」。*it* は *sô huat sô* を受けている。*obar* は「(ある程度を)越えて」の意。この句全体が *gefrummiad* の対格目的語。*man* : 複数。*gefrummiad* : 3 人称複数。

1525) *fan ubile* : 「不義から」。*eldibarunun* : 複数与格。

1526) *that* : 「その結果」。*thurh untreuua* : *untreuua* は単なる「不誠実さ」ではなく、ケルマン語本来の法律的色彩の濃い「いつわり」、ここではむしろ「偽証」であろう。キリスト教的精神が浸透していなければ偽証も多く、作者はそんなザクセン社会の現状を意識して 1526 行の一文を補足したのでであろう。「マタイ」5 章 37 節では (*quod autem his abundantius est*), a malo

est「(それ以上のことは) 悪いことです」のみ。

1527) **ôdres**…**uuordo** [C写本は**uuordu**] **gelôbian** : 「他者をその言葉において信じる」。属格とも考えられるがC写本の形からも **uuordo** は具格と解すべきであろう。**ôdres** は **gilôbian** の属格目的語。

1528) **gebiudit** : 自動詞的用法 (529行、1074行、1476行に既出)。

1529) **ôgon** : *swm. ôga* 「目」(独Auge, 英eye)の複数対格。C写本では **ôgun**

1530) **ettha** : = *eftha, eftho* (27行に初出)。**lido** : *lid*(独Glieb, 英limb)の複数属格。

1531) **is selbes** : *he self* の属格形。次行の **lidion** にかかる。**ant-geldan** : *stn.* (Ⅲ-2)「償う」(独ent-gelten)の不定形。

1532) **uurecan** : *wrekan stn.*(Ⅳ)「復讐する」(独rächen, 英to wreak)の接続法現在、2人称複数。*wrekan* の語源については、554行 **wrak-sid**「追放(の旅路)、国外追放」、および631行 **wrekio**「異国の勇士」の註を参照。

1534) **gethologian** : 接続法現在、2人称複数。独(er)dulden。502行などに既出。

1535) **uuities endi uuammes** : 前行の *al* と結ぶ部分属格。**gedôe** : *gi-dôn* の接続法現在、3人称単数。

★ 1536 – 1554行までは **Tatian** に応じて「ルカ」6章31節、34節、35節にもとづく(いわゆる「平地の説教」)。

1537) **frume** : = *fruma*。**gefôri** : *gi-fôri, stn.*「利得、有用さ」。**fôrian**「(前へ)導く、運ぶ」(独führen)の派生名詞で、原義は「他者より先に導くもの」。現代独 *Vor-teil*「利益、有利さ(人に先立つ部分)」と同発想の語。なお **fôrian** は *faran*「行く、前進する」(独fahren)の作為動詞で、「前進させる」が原義。**sô he uuillie** : 「もし…を欲するなら」。**sô** は従属接続詞。

1538) **gôdes** : 名詞化。いわゆる部分属格。**dôen** : 接続法現在、3人称複数。**mildi** : この語の世俗的意味(気前の良さ)については1312行註を参照。

1539) **sô** : 関係代名詞。

★ 1527行から1535行までは、ほぼ「マタイ」5章38節、39節に相当する：「『目には目で、歯には歯で』と言われたのを、あなたがたは聞いています。」(38節)、「しかし、私はあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。」(39節)。だが **Tatian** (31章)ではすべてそのまま訳してあるのに、『ヘーリアント』の作者は、38節の「歯」や39節の「頬」の例はあえてザクセン語に取り入れようとはしなかった。淡々とした抽象的言辞ならばともかく、このようなあまりになまなましい具体例は、とうていザクセン聴衆が納得するものとはならないことを危惧したからであろう。右の頬を打たれて左をも向けるなどということは、ゲルマン武人にはあるまじき卑怯な態度でしかなかったであろうから。

★ 1536 – 1538行までは「ルカ」6章31節のいわゆる「黄金律」*die goldene Regel* の箇所、かなり忠実な翻訳と言い得る。

1540) **êrod** : *swv.* êron 「援助する、慈悲深くある；与える」(Ÿehren 「尊敬する」) の命令形 2 人称複数。原義は神々の前でつつしむことだったが、この時代には「慈悲深くあること、具体的に人助けをすること」の意で用いられることが多かった。現代独の Ehre 「名誉」、(ver)ehren 「敬う」などは中高独語期にラテン語 *honestum* や *honestas* の抽象的意味に影響されたものである。したがって名詞 *êra* も「榮譽」の他に「援助、報い」の意をも表わす。 **arme man** : 福音書になし。このあたり聴衆が貴族層であることを予想させる口調である。1553 行にも再度貧者が言及される。 **dêliad** : *swv.* dêlian 「分け与える」(独 *teilen*, 英 *to deal*) の命令形 (2 人称複数)。

1541) **rôkead** : *swv.* rôkian 「氣にかける」の命令形 (2 人称複数)。英 *reck-less* 「意に介さない」、独 *ruch-los* 「神意を氣にとめぬ」の前半部や、独 *ver-rucht* 「破廉恥な (＜神意を意に介さぬ)」、*ge-ruhen* 「…して下さる」の後半部からわかるように「気づかい、注意」が原義。 **huuedar** : 554 行に既出。原義は「二つのもののどちらか」。 **is ênigan thanc** : 「それに対する(is)いかなる感謝をも」。 **antfâhan** : 接続法現在。

1542) **lêhneon** : *adj.* lêhni 「はかない、借りものの」の弱変化、女性単数与格。原義は「借りられた、貸し出された」で、独 *leihen*, 英 *loan*, *to lend* と同系。古英語に同じ構造で同じ意味の *adj. læne* があり、多分にその影響が創造される。 **huggeat te …hêrran / thero gebono te gelde, that …** : 「御主君がそのような贈り物の褒美として (以下のように) …してくれることを信頼せよ」。 *huggian* は前置詞 *te* と結んで「…の事を考える、信じる」。

1543) **sie** : *geba* の複数対格。 **lôno** : *swv.* lônon 「報いる」(独 *lohn*) の接続法現在。

1544) **sô huuat sô gi is** : *is* は具体的には前行の *thero gebono …sie …* を指す(但し単数にまとめてある)。 **hwat** と結ぶ代名詞属格。 **thurh is minnea** : 「神への愛の故に」。

1545) **gebogean** : *swv.* *gebon/gebogean* 「贈り物をする」。強変化の *geban* から新たに作られた弱変化動詞。したがって *ge-* は前綴ではなく、頭韻を担っている。

1546) **fehoscattos** : *stm.* *fehu-skāt* 「貨幣、金銭」の複数対格。 *fehu* は 390 行参照。 *skāt* 「貨幣；財産；(稀)家畜」(独 *Schatz* 「宝物」) はゴート語以来の語であるが語源未詳。**skillinga* (後の *Schilling*) が金貨、*skāt* が銀貨とする説もある。ゲルマン諸族は長らくローマ貨幣を用いていたが、カール大帝以降は独自の貨幣も鑄造され、『ヘーリアント』の時代には美しい金銀貨も良く知られていた。『ヘーリアント』詩人は *fagara fehuscattos* 「輝く金銀貨」という頭韻句を好んだらしく、他に 1648 行、1854 行でも用いている。上層の人々が多かったと思われる聴衆に容易に受け入れられる具体的イメージの用語と言えよう。 **thar** : 関係副詞(独 *da*, *wo*)。

1547) **thes** : 後続の *mêda* および *lôn* と結んで「それに対する(報酬)」。 **êniga** : 「なんらかの」。

★ 1545 行 *gôdun mannun* の *gôd* は道徳的意味ではなく、「富んだ、貴顕の」ほどの意味であろう。「富んだ貴顕人士に金銭を渡して、より多くの利を得ようとする」というのは、あるいは金貸しのことだろうか？

1548) **an themu is liohte?** : isはgodを指すから「神の世において」の意。従来の翻訳で「この世で」となっているのは誤り。

1549) **sô is** … : 「同様である」。

1550) **te leobe** : 独 *zuliebe*。497行、1286行に既出。

1551) **thes** : *thanc* と結び「それに対する恩恵」。

1552) **thes** : 「…の故に」の意の接続詞だが(独 *deshalb, weil* …)、前行の **thes** にもかかっている。
thin : 「あなたの物を」。**than** : 時間の従属接続詞(独 *wenn, als*, 英 *when*)。500行に初出。

1553) **geban** : 接続法現在、2人称複数。C写本は命令形 **gibat**。

1554) **lônnon** : 接続法現在、3人称複数。**rômot** : *swv. rômon*(*te*とともに)「…を得ようと努める」の命令法複数。語源未詳。

★ このあたりはほぼ「ルカ」6章34節、35節に対応しているのだが、原拠にある「罪人(*peccatores*)ですら」や「悪人(*malos*)にでも」といった強く響く表現を『ヘーリアント』の詩人は一切用いていないのは注目に値する。そして「貧者に施しをするよう」くり返し述べているのもここである。——これは詩人の歌を聞くザクセン聴衆の多くが富裕層や貴族たちであることを物語っていないだろうか？詩人は誇り高い彼らを「悪人 罪人」に例えることは巧みに避け、もっぱら貧者への施しを推奨するのである。愚直と言っていほど忠実に福音書の辞句を直訳する *Tatian* と比べたとき、聴衆を眼前にした「語りもの」としての『ヘーリアント』の性格がいっそう顕著となるように思われる。

1555) **te hlûd** : *Litotes* の例。

1557) **thurh godes thanc** : 「神の恩顧のために、恩寵を願って」。

1558) **bitharft** : 過去現在動詞 *bi-thurban* 「必要とする」(独 *bedürfen*)の現在2人称単数。属格目的語(*es=geld*)をとる。

1559) **is** : *huuat* につく部分属格の代名詞。

1560) **darno** : *adv.* 「秘密裡に」。1047行の *darnungo* と同義。53行 *derni* 註をも参照。
gedêleas : *swv. gi-dêlian* 「分け与える」(独 *teilen*, 英 *to deal*)の接続法現在、2人称単数。

1561) **galpo** : *swv. galpon* 「大騒ぎする；自慢する」(英 *to yelp* 「かん高く叫ぶ、キャンキャン鳴く」)の命令形。1072行の *galm* 「物音」、1084行の *gelp* 「大言壮語；嘲笑」と同根の擬音語。ここは「マタイ」6章2節の *noli tuba canere ante te* 「(施しをするとき)自分の前でラッパを吹いてはいけません」に対応する箇所だから(*Tatian* はそのとおり *trumbun singan* と訳している)、*galpan* は単なる「自慢する」ではなく、ちょうど日本語の「法螺を吹く」のように、大騒ぎして触れまわることを意味する。**gebun** : *stf. geba* の複数与格。**te suuido** : *Litotes*
noh : = 独 *und nicht*, 英 *and not* **ne scal** : 本動詞として *galpon* を補うとよい。

1562) **that** : 「…(しない)ように」。目的の接続詞。**siu** : = *geba*(単数、前行 *far thinun geban* は複数であるが、ここでは単数で受けている)。**idale** : *adj. idal* 「空虚な、むなしい」

(独 *eitel*, 英 *idle*)。語源未詳。 **hrôm** : *stm.* 「誇り、名声、喜び」(独 *Ruhm*)。945行に *adj.* *hrômag* 「誇らしい」が既出。もとは独 *Ruf, rufen* 「叫び」「叫ぶ」と同根で、「声高に自慢する」意。 **uuerde** : 受動助動詞、接続法現在3人称単数

1563) **lêdlîco** : *adv.* 「いたましくも」(独 *leid-voll, leidig*, 英 *loath-somely*)。 **farloren** : *stv.* (Ⅱ) *far-lîosan* 「失う」(独 *ver-lieren*, 英 *to lose*)の過去分詞。「切断」の意の印欧祖語 **leu-*に由来し、独 *los, -los*, 英 *-less* などと同系。

1565) **than** : = 独 *wenn*, 英 *if*。1569行の *than* と呼応。：「もし…なら、そのときは」。

1566) **te iuuuomu hêrron helpono biddean** : 「主に加護を願う」。 *biddian* (独 *bitten*, 英 *to bid*) はこのように「*te* + 人の与格 + 物の属格」を取るほか、「人の対格 + 物の属格」、「人の与格 + 物の属格」、など、目的語の形式に関してまだ固定していない。高地独語においても同様で、現代独の「人の対格 + *um* + 物の対格」に固定したのは19世紀以後である。

1567) **that** : 目的の接続詞。前行の *biddian* に結ぶ。

1568) **secono** : 1521行の *saka* 「訴訟沙汰」とはちがって、「争い」から更に派生義の「罪悪、咎」。古英語に比して古高独語ではこの用例はあまり多くないので、古英語的な用法と思われる。

1569) **uurêda** : 女性複数対格の関係代名詞 *thea* にかかる形容詞。しかし *gi* にかかる主語とも解せる。 **that gi** … : 1565行の *gebeodan* の内容を示す接続詞。したがって1565行後半から1569行前半までは長い挿入句。複雑な構文であるが、*than* … *than* … という呼応により、また実際の朗唱においては強弱音の技巧などを駆使することにより、内容の大筋は聴衆に理解されたことであろう。しかしかなり「バロック」な文体ではある。

1570) **mâread** : *mâr* の原義は「大、壮」だから、「大言壮語する」に近い。 **that** : 目的の接続詞。

1571) **diurean** : 前行の *lobon*, 次行の *farleosan* と同じく前行の *that* 構文に含まれる接続法、3人称複数。人の対格と（原因を示す）物の属格をとる。 **gibed** : *stn.* 「祈り」(独 *Gebet*) の単数対格。「祈り」は592行初出の *stf. beda* が普通で、*gibed* はこの1例のみ。語源については592行、644行 (*bedon*)、672行 (*knio-beda*) の註を参照。なおこの *iues drohtines gibed* はもちろん「汝らの主に対しての祈り、お願い」のことであるが、次の第19歌章で紹介されるいわゆる「主の祈り」を先取りしているとも考えられる。

1573) **than** : 1565行と同じ従属接続詞で1576行の *than* と呼応。：「もし…なら、そのときは」。

1574) **thiggean** : *swv.* 「懇願する、(懇願して) 受け取る、もらう；願う」の不定形。99行、499行に既出。 **thes iu is tharf** : 1187行に類似構文が既出。 **is** : < *wesan*。

1575) **sigidrohtin** : *stm.* *sigi-drohtin* 「勝利の主、神」(独 *Sieges-herr*)。3例のみ。 *sigi* はゴート語 *sigis* 以来のゲルマン共通語彙で、*Sieg-fried* や *Sig-linde* など人名にも残る。J.Grimmによればこれはゲルマンの主神（戦闘神）*Wodan/Odin* に対する *Kenning* が、後にキリスト教の神に転用されたもの。古英語 *sige-dryhten* は「神」の他に(*Beowulf*)世俗の君主について用いられ

(Widsith)、『ヘーリアント』のこの用法にも古英語からの影響が予想される。ちなみに古高独語には対応語は登場しない。なお Ilkow は、Wodan/Odin の Kenning という筋よりも、世俗的君主について西ゲルマン共通語であったこの表現が、聖書の Deus victoriae (『マカベア第2書』13章15節)などに影響されてキリスト教の神に転用されたと考えている (Ilkow, 350頁)。
tômea : *swv. tōmian* 「(人の対格、物の属格) (…に…)を免れさせる」の接続法現在形。1016行に同義の a-tōmian が既出。

1577) **biholan** : < *stv. bi-helan* **neouuiht** : =eo-wiht, gio-wiht。次行の wordo と werco という複数属格名詞と結ぶ。

1578) **sô** : 次行冒頭の sô と結び「…ように、そのように」。

★ 1565 - 1580行はほぼ「マタイ」6章5節および6節に対応するが、「また、祈るときには偽善者たちのようであってはいけません。彼らは人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。」(5節)や、「祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして戸をしめて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。」(6節)といった具体性はまったく盛り込まれていない。「偽善者」という強い響きのネガティブ表現は貴族層の聴衆の耳には不快であったろうし (Tatian では忠実に *lihhezari* 「人に気に入られようとする者、へつらい者」と訳している)、また「隠れて祈る」というのも武人気質の濃いザクセン族にはふさわしくない。詩人はそう判断してやや具体性には欠ける抽象的表現を選んだのではないかと思われる。

1584) **gehogdin** : *swv. (gi)huggian* 「考える」の接続法過去、3人称複数。 **that** (後半行) : 前半行の指示代名詞 **that** を受ける関係代名詞。

1585) **an thana forman sîd** : 「はじめて」。*adj. formo* については217行註を参照。
filu : 名詞的用法 次行の **torhtes** と結ぶ。

1586) **torhtes** : 「輝かしいことの」。

★ 1580 - 1586行までは福音書にない補足文。キリストによる山上説教の長い前半部をいったんしめくくる叙景文。説教があまりに長いので第16歌章冒頭部(1280行あたり)とこことで聴衆に状況を再確認させようとしていることになる。『ヘーリアント』詩人の好む「枠構造」のひとつ。それにしても、キリストの言葉をただ聞き流すのではなく、さまざまに「思いをこらす必要が彼らにはあった」(1583行、1584行)という文章には、同朋たるザクセン聴衆を前に自分が心から信奉する新しい教えをケルマンの詩歌として朗唱し、説かんとする詩人の複雑な思いもこもっているのではなからうか。

1586) **tuuelibio** : 数詞 *twelîf* の属格

〈第19歌章 山上の説教（続き）〉

「心やさしき主よ、あなたのお情けをいただきたいのです、
 あなたの教えを実行するために。あなたのお言葉をも是非とも
 いただきたい、ああ、すべての人の子の最善の御方、 1590
 あなたの弟子である私たちに お祈りを教えてください、
 あの立派な洗礼の授け手 ヨハネが毎日のように
 周囲の人々に 言葉をつくして教えているように、
 どのようにあの良き支配の君に 呼びかけたらよいのかを。
 あなた自身の弟子にもその秘密を お明かし下さい。」 1595
 するとこの力強き御方、主の子息はたちまちに
 良き言葉を返したのである：「もしあなたがたが自分の言葉で
 支配者である御方に、あらゆる王の中の最強の王に
 呼びかけたいと思うなら、私が今教えるようにこう言いなさい：

私たち、すべての人の子の御父よ、 1600
 あなたは高き 天の国におられます。
 ひとつひとつの言葉をもって 御名があがめられますように。
 あなたの力強き御国が 来ますように。
 あなたの御心が この世界のすべてに成りますように。
 高い天の国において そうであるように 1605
 同じようにこの 地上においても。
 慈愛の主よ、 毎日の必要なる備えを
 聖なる助けをお与え下さい。そして、天の守り手よ、私たちの
 多くの罪をお許し下さい。そして他の人々に対しても私たちが
 同じようにいたしますように。 邪悪な霊どもによって私たちが 1610
 当然の報いとして 彼らの意のままに悪に誘われることのないように、
 ありとあらゆる悪しき行いから 私たちをお救い下さい。

このように乞い願いなさい。 祈りのために膝まづき、
 世を統べる神様が この人間世界におけるあなたがたの不義を

お許し下さるよう みずからの言葉をもって。 1615
 もしあなたがたが、 人々があなたがたにこの世において行なう
 不義と罪とを、 ひとり残らず許してやろうと思うなら、
 そのとき、支配者である神、全能の父は
 あなたがたの数多き悪事という さまざまの冒瀆をも
 お許し下さるのである。 しかしもし、あなたがたの心が厳しすぎて 1620
 他の人々の悪しき行為を 許さないとすると、
 支配者である神もまた あなたがたの悪行を
 許しては下さらない。 あなたがたは実につらい報いを、
 この世であなたがたが他の人にやってきた あらゆる悪事の応報を
 長い期間じゅうずっと 受けなければならない。 1625
 そしてもし、あなたがたがこの世を去って あの旅路におもむく前に
 人の子たちとの争いについて 仲直りしておかないならば
 その報いを受けねはならぬのだ。 また、話しておこう、
 どのように私の教えを 実行したらよいのかを。
 もしあなたがたが断食をして、 我が身の悪しき罪を 1630
 軽くしようと思うなら、 それを多くの人々に知らせてはならず、
 むしろ人の前から隠すがよい。 けれども力ある神、支配する御神は
 あなたがたの心を知って下さるのである。 世の人々、人の子たちは
 あなたがたを誉めないとしても。 あなたがたの天国におられる父君は、
 その報いを必ず与えて下さるのだ、 勇士であるあなたがたが 1635
 謙虚に、かつ敬虔に、 この世にいる間にあの御方にお仕えした
 その程度に応じて。 不正な手段で富を望んではならない。
 天上の神の報いのみを念じて 努めるがよい。
 この地上で裕福に、 世俗の財宝に慣れきって
 暮すよりも、 この方がはるかに立派なことなのである。 1640
 もし私の言うことを 聞こうと思うなら、決してこの世の、
 この中つ国の 金や銀といった財宝の類を
 あつめてはならない。 なぜかと言うに、
 それらはここでは錆びて朽ち果て、 悪者どもが盗み、
 虫が損なうからである。 衣服はすり切れ、 1645
 黄金の宝も消えてなくなる。 良きわざをしなさい、

天の国において もっと価値のある
 見事な貨幣をあつめなさい。 どんな敵もそれを奪えず、
 たとえ一片たりとも盗めはせぬ。 なんとすれば、宝は既に
 あなたがたのために積まれているのだから。 あなたがたが良きわざによって 1650
 天の国に貯えたものすべて、 あなたがたみずからの手で施した
 すべての宝が。 そこへと心をしっかり向けるがいい、
 というのも、 財貨が積んであるところに、
 宝物があつめられているところにこそ、 あらゆる人の思考が、
 心と想いがあるのだから。 この広い世界においても 1655
 いまだかつて、 この地上の富と、すべての世俗の楽しみにも恵まれ、
 同時にまた 支配する御方である神様に
 じゅうぶん気に入られるように お仕えすることのできた
 そんな幸せな人がいたためしはない。 人はどんなことについてであれ、
 いつでもふたつのうち ひとつは失わなければならぬ、 1660
 肉体の楽しみか、 または永遠の生命かを。
 だから衣服について悩んだりせず、 思いを固く神に向けなさい、
 明日は何を食べ、 何を飲もうかとか、
 何を着ようかなどと、 心の中で思いわずらっては
 ならない。 神はすべてを知っておられる、 1665
 この世で神に心からお仕えし、 主なる御方の御心に従う人々に
 何が必要であるのかを。 まことに、あなたがたはこれについて
 あの鳥たちを見ればわかるであろう。 この世に住んで
 羽の衣で往き来するあの鳥たちである。 財産のひとつすら得る術も
 知ってはおらぬのに、 主なる神は一日も欠かさずあの鳥たちを 1670
 飢えから守って下さるのだ。 この野に生えている草木が
 何と美しく飾られ、 何と見事な花をつけていることか。
 あの城の守り手、 多くの財宝を持ち、
 およそひとり人間の 所有できるかぎり 1675
 最大の金銀財宝と、 あらゆる衣装の選りぬきの美服とを
 たっぷり貯えていた あのソロモン王でさえ、
 今この野に立っている この草花がもっているような
 そんな衣装を その生涯において得ることはできなかったのである、

この国土を支配していた王者にもかかわらず。 この美しく飾られた 1680
 愛らしい花をつけた百合を 天の牧場から装って下さるのは
 全土を統べる御方なのだ。 だがそれにもかかわらず神にとっては
 勇者の一族の方が、 神がみずからその御心にしたがってこの世に
 創り出した人間の方がもっと大切で、 ずっと好ましいのである。
 だから衣装に心をわずらわせたり、 執着してはなりませぬ。 1685
 あなたがたが彼の恵みを求めてお仕えするなら、 神は天の牧場から
 すべてを考慮し助けて下されます。 何よりもまず神の国を求め、
 それから神の良き御業にまねて行い、 正しい事を努めなさい。
 そうすれば力ある主は あらゆる良き物をお与え下さるのである、
 私が今ここで話すように、 神に従う心さえあれば。 1690

〔福音書その他との対応〕 1586 - 1595 行は「ルカ」11 章 1 節、1595 - 1599 行は同 2 節、
 1600 - 1612 行は「マタイ」6 章 9 節、10 節、11 節、12 節、13 節。1616 - 1620 行は同 14 節、
 1620 - 1628 行は同 15 節、1628 - 1637 行は同 17 節、18 節、1637 - 1641 行は補足、1641 -
 1649 行は同 19 節と 20 節、1653 - 1655 行は同 21 節、1655 - 1659 行は同 24 節の一部、1659 -
 1661 行は補足、1662 - 1665 行は同 25 節、1667 - 1671 行は同 26 節、1671 - 1674 行は同 28 節、
 1674 - 1681 行は同 29 節、1681 - 1684 行は同 30 節の一部、1684 - 1685 行は同 31 節の一部、
 1685 - 1686 行は同 32 節、1687 - 1690 行は同 33 節。

〔Tatian との対応〕 34 章の 5 節以降、35 章の 2 節、36 章全部、37 章の 2 節、38 章 1 - 2 節、
 4 - 7 節。

第 19 歌章 註解

1588) **thinoro huldi** : 単数属格。tharf を主語とし、人の与格と物の属格をとる。この構造
 は 1187 行に既出。次行 **thinoro uuordo** も同じ機能の複数属格。

1590) **that** : 目的の接続詞。 **ûs bedon lêres** : ûs は対格、lêres は lèrian の接続法現在。

1592) **dôperi** : *stm.* 「洗礼者 (ヨハネ)」 (独 Täufer)。883 行 **dôpian** の項でふれたように、ゴ
 ート族伝道団に由来すると思われる。古英語は *bæzere* (<ラテン語 baptista)。 **gehuuilicas** :
 副詞的属格「毎日」。

1593) **is uuerod** : 対格。lèrian の代動詞 **duot** が、そのまま lèrian が必要とする対格を引きつ
 いでいる。同様の例は 1455 行に既出 1594 行の **Dô** は写本によって揺れがあり、C 写本では **thina**
iungorun (対格)、M 写本では **thinun iungoron** (与格) となっている。

1594) **grôtean** : この時代、単なる「挨拶する」だけでなかったことについては819行註参照。

1595) **geriht** : *swv. gi-rihtian* 「①正しくする；②(正しく)説明する」の命令形、2人称単数。reht(独recht, 英right)と同語源。現代ドイツ語では「正しくする」はberichten, 「(正しく)伝達する、知らせる」はberichten, と分化しているが、この時期においては古高独語、古ザクセン語、古英語とも未分化。**gerûni** : *stn. gi-rûni* 「秘密、神秘」の単数対格。第3行その他に既出。1273行既出のrûna 「(秘密の) 相談、話し合い」と同語源で原義は「ひそひそ話」だが、古高独語、古英語、古ザクセン語とも、「秘密、神秘」の意に固定している。

★ 「ルカ」1章1節では単に「私たちにも祈りを教えて下さい」となっている。girûniという単語を用いることによって作者は、ゲルマンの神々に呪文を捧げる記憶をまだ完全には失っていない聴衆に、「主の祈り」をも同様のもののひとつとして理解しやすくすることを意図したのであろう。

1597) **Than…than (1599)** : 1565行以降に類出。

1599) **goedad** : 命令形。

1600) **Fadar ūsa** : C写本ではこの前にPater nosterというラテン語が来る。**firiho barno** : fadarと結ぶ複数属格。所有代名詞ūsaの説明語。

1601) **himila** : この複数(属格)形については491行註を参照。1606行も同じ。

1602) **uuordo gehuulico** : 「そのひとことひとことをもって」。頭韻の都合で補われた語句とはいえ、「主の祈り」を呪文に類するものと聴衆に思いこませる働きをもったであろう。

1607) **rād** : 「助言、援助」が一般的な意味(226行に初出)だが、ここでは「生活に必要な品物、糧食」の意(独Vor-rat)。「主の祈り」の原文はpanem nostrum cotidianum「私たちの日ごとのパンを」だから、「パン」を素直にbrōdとしていないことが目立つ。頭韻を踏まなくてもよい部分なのでbrōdで差しつかえないはずなのに、そうしなかったのは、「パン」brōdではあまりに日常的・卑俗で、崇高なる祈りの言葉にふさわしくないと詩人が判断したからかもしれない。ちなみに日本の口語訳聖書(新共同訳)でもこの部分だけは文語的な「糧(かて)」を用いている。

1609) **ūs** : 与格とも対格とも解し得る。**mēnsculdio** : *stf. mēn-skuld* 「罪惡、違反」(独Schuld)の複数属格。前行a-lātanが属格目的語をとるため。skuldは印欧祖語*skel-「責めを負う」に由来し、独sollen, 英shallと同系。ゲルマン社会には罰金刑の概念があり、skuldは罰金とも受けとられる可能性もあったから、mēn-という宗教的響きの合成要素が(頭韻の必要の外に)是非とも必要だったろう。**dōan** : 接続法現在。主語weに対する要求を表わす。

1610) **ūs** : 対格。farlēdean「誘惑する」の目的語。**lēda uuihti** : 「悪霊ども」。複数対格。lātの目的語でfarlēdeanの主語。wihtiについては83行と1030行の註を参照。原文のa malo「悪しき者から」(単数)を複数形に変えたのは、この当時ゲルマン語の一般的慣習による。

1612) **help ūs uuidar**… : 「…に対して私たちを(与格)守りたまえ」。

★ 頭韻上の必要もあるが、lēda wihti (1610), sō uui uuidige sind (1611), uuidar allun ubilon

dādium (1612)など、「主の祈り」の原文にはない補足、しかも具体性を高める補足が目立つ。

1615) **leutcunnea** : *stn.* liud-kunni 「人類」の単数与格。頻出する同義語 **man-kunni** の、頭韻の必要から作られた Variation。この1例しかない。

1617) **the sie** : **the** は *thero sacono, sundeono* を先行詞とする無変化関係代名詞。次行の *adj.* **wreda** が後からさらに **the** を修飾する。**sie** は *liud-kunni* を受ける人称代名詞、単数主格。

1619) **firinuerk** : 前行 *alâtîd* の対格目的語。次行の *mênsculdeo* という属格につく：「多くの悪事という冒瀆を」。

1620) **te stark** : 「あまりに硬化した、あまりにも敵意に充ちた」。**stark** のこの意味の用例は1452行に初出。

1622) **uuamdâdi** : *stf.* *wam-dâd* 「悪事、罪」の複数対格(*wam* については742行註を参照)。前行の *alâtan* の目的語で、人の与格(*odrun erlun* と *weron*) とともに。

★ 1608行以降1621行までに *alâtan* が5回登場するが、人の対格+物の属格、人の与格+物の属格、人の与格+物の対格などさまざまなになっている。いくつもの可能性が *alâtan* にはあり、詩人は Variation の意識をもってそのすべてを開陳したのであろう。

1623) **grimuerk** : *stn.* *grim-werk* 「悪事、悪行」の複数ないし単数対格。*grim* の語源については1348行註を参照。 **is geld** : 「その報いを」。*is* は1625行の *alles thes unrehtes* (およびそれ以下の文) を先取りしたもの。また *waldand god* のこととも考えられる。

1624) **te languru huûilu** : 「長期間にわたって」。*huûilu* は単数与格

1626) **endi than** … : *than* = 独 *wenn*, 英 *if, when*。 **uuid** : 次行の *gi-sônian* は対格目的語と *wid* … をともなって「…と、ある事について和解する」。1469行に既出。

1630) **fastonnea** : = *fastunnia*。876行に既出。「断食」は大多数のザクセン人聴衆にとってまだ理解しにくい行為だったに違いない。だから次行で「汝らの悪行を減少させるために」という、この箇所原拠となった「マタイ」6章17節にはない一文を補っているのだろう。

1631) **minson** : *swv.* 「減少させる、縮小する」の不定形。「減少」を示す印欧祖語 **mei-*, *mineu-* に由来し、ラテン語 *minus*, *minor*, 独 *minder* などと同系。ゴート語 *minznan*, 古英語 *minsian*, 古高独語 *minniron*, 現代独語 *ver-mindern*。 **duad** … **cûd** : = 独 *kundtun*。ここでは **te** と人の与格をともなっているが、他の箇所では前置詞なしで人の与格のみをともなっている。

1632) **mîdad is** : *mîdan* は属格目的語をとる。 **thoh** … **thoh** (1633) : 前の *thoh* は「しかし」、後の *thoh* は従属接続詞「…にもかかわらず」(英 *though*)。

1634) **after thiû** : *Sehrt* は時間的に「後に」と解釈しているが(Wb. 'after' の項2) a)、1636行の *thes* 以下を受けて、「…するので、それに応じて」という「理由」の方がよいように思われる。

1636) **thes** : 接続詞。

★ 「マタイ」6章17節「しかしあなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗い

なさい」や、同16節の「偽善者たちのように」などはTatianとは異なって取り入れられていない。『ヘーリアント』の詩人は、ザクセン人聴衆には縁遠い具体的な描写やあまりに露骨な強い印象の表現は避けて、その大意のみを伝えようとする傾向がある。

1640) **ôdag** : *adj.* 「財物に富んだ」。1099行ôd「財宝」、947行up-ôd「天の財宝」、124行ôðan「恵まれた」の各註釈を参照。 **libbea** : libbianの接続法現在。

1641) **uueroldscattes** : *stm.* werold-skāt「現世の財宝」(独weltlicher Schatz)の単数属格。
geuuno : *adj.* 「…に慣れている」(独gewöhnt)。属格の目的語をとまう。*swv.* wonon, *wunon*「滞在する、住む」(独wohnen)と同系。 **uuardun hôrean** : 「従う」の意のhôrianは与格目的語をとる(498行他に既出)。

1642) **sinc** : *stn.* sink「財宝」の単数対格。古英語と古ザクセン語にのみ登場する語で語源未詳。あるいはsinkan(独sinken, 英to sink)の派生語で、「水中や地中に沈めて隠しておく金銀財宝」の意か？

1643) **mêdomhordes** : *stn.* mêdom-hord「貴金属や宝石類、財宝」の単数属格。mêdomは1198行に既出。hord「財宝、秘宝」(独Hort, 英hoard「秘蔵、退蔵」)は独Hose「ズボン」やHausと同じく、「おい隠す」を意味するゲルマン祖語*huzda-に由来し、「おい隠されたもの」が原義。前行のsinkと類似の命名のように思われる。独では「財宝」の意味では中世末期以来Schatzに駆逐されていたが、18世紀に叙事詩Nibelungenliedの発見とともにNibelungenhort「ニーベルンゲンの財宝」という語が知られるようになってから、雅語としてではあるが再び用いられるようになった。

1644) **rotat** : *swv.* roton「腐る」(英to rot, 独ver-rotten)の現在3人称単数。古ノルド語、古英語、古ザクセン語のみに見られ、ゲルマン祖語*reutan-「泣く」に由来するものと思われる。独verrottenは17世紀に低独語から取り入れられた。 **roste** : *stm.* rost「(赤)錆」(独Rost, 英rust)の単数与格。原義は「赤い色をしたもの」で独rot, 英redと同根。 **regitheobos** : *stm.* regin-thiof「(強力な)盗人」(英thief, 独Dieb)の複数主格。regin-, regano-は印欧祖語*reg-「指令」に由来し、ゲルマン語では「判定、決定；神意」、またそこから発して「権力、勢力」などの意味をもった。古ノルド語regin(中性複数)は人の運命を左右する「神々」のことである。しかし古英語や古ザクセン語のregin-は既に強意の接頭辞と化しており、多くの場合においては単に頭韻の都合上つけられたと考えてほぼ間違いのないようである。もちろん「強力な；人が反抗することができない」という含意は常に感じられたではあろうが。regin-の「とても」という程度の強意接頭辞から作られた人名がReinhart(古高独語Reginhart, 古英語Regenheard；原義は「とても勇敢な」)である。後半のthiofは、既にゴート語Þiubs以来の共通ゲルマン語彙であるが、語源未詳。 **farstelad** : *stn.* (IV) far-stelan「盗む」(独stehlen, 英to steal)の現在3人称複数。これもゴート語stilanをはじめとする共通ゲルマン語彙であるが、語源未詳。

1645) **uurmi** : *stm.* 「①虫、②蛇」(独Wurm, 英worm)の複数主格。語源は諸説あるが、印

欧祖語 **uer-*「曲りくねる」に由来するという説が穏当のようである。①と②の関係は、日本語でも「蛇」を「長虫」と言うことから容易に想像がつく。 **auuardiad** : *swv.* a-wardian, a-werdian「損なう、駄目にする」の現在3人称複数。変化を示す接頭辞 a-に、werdan(独 werden)の過去形をもとにして作った作為動詞 *wardian, werdian「成らしむる」のついたもの。したがって原義は「変化を生じさせる」。1348行 a-werdan「駄目になる」を参照。 **giuuādi** : *stn.* gi-wādi「衣服」。接頭辞のない wādi は379行に既出。語源は「織ったもの」で独 *weben*, 英 *to weave* と同根。形がよく似ている現代独 *Gewand* は *wenden*「曲げる、たたむ」、*winden*「巻く」と関係があり、gi-wādi と直接的関係はない。 **farslitan** : < *far-slitan*。1179行に既出。

1646) **tigangid** : *stv.* te-gangan「溶けてなくなる」(独 *zer-gehen*)の現在3人称単数。**golduuelo** : *swm.* gold-welo「黄金という富」。welo は871行に既出。

1647) **hord** : 1643行の *mêdom-hord* の項を参照。 **that mēra** : 類出する「名詞+定冠詞+弱変化 *adj.*」の1例 (*drohtin the gôto* のように人物名詞のことが多いが、1096行の *ēnan berg then hōnon*, 1509行の *bi himile them hōnon* のように事物名詞のこともある)。

1649) **anuuendean** : *swv.* an-wendian(人の与格と物の対格をともなって)「…から…を奪う」(独 *ent-wenden*)。

1651) **gesamnod** : *gi-samnon* の現在3人称複数とも、過去分詞とも解釈できる。後者の場合は *hebbiad* が省略されていることになる。

1652) **handgeba** : *stf.* hand-geba「(みずからの手で与える)贈り物、施し」の複数対格。ギリシャ系ラテン語 *elemosyna*(独 *Almosen*, 英 *alms*)の意訳語と思われる。対応する古英語 *handgift* は「(男が女に贈る)結納」に意味が限定される。 **hebbead** : 命令形。

1653) **môdgethâhti** : 329行に既出の *stf.* *môdgethâht*「思い、心」の複数主格。ただし動詞は、これを集合名詞的に把握して単数 *ist* となっている。

1654) **thar** : 前行の *thar* と結ぶ一種の関係副詞(独 *wo*, 英 *where*)。前行 *thar* は副詞で、*dort*, *da*, 英 *there* に相当する。

1655) **gesamnod** : 過去分詞。

★ このあたりは、ほぼ「マタイ」6章19-21節に対応する。ただし、輝く金銀財宝、また豪華な衣服類に対するゲルマン人の素朴な愛好心が「マタイ」よりもはっきり表現されているように感じられる。ヴァイキングの墓所などでこのような財宝が発見されることは、今なお稀ではない。そして *Tatian* では続いて訳されている「マタイ」6章22節の目に関する言及は詩人は無視する。金銀財宝に比べて聴衆へのインパクトが少ないと判断したのだろう。

1656) **bêdiu** : 中性複数対格の代名詞。 **anthegean** : C 写本では *athengian*「実行する」。語源は646行註を参照。

1657) **ge** : 接続詞。次行の *ge*…と結んで「…も…も」。354行には *ia*…*ia*…として登場。

1658) **uueroldlustun** : *stf.* *werold-lust*「世俗的楽しみ」の複数与格。 **uuesā** : *wesan* の

接続法現在3人称は圧倒的に*si*が多いが、ここでは頭韻の必要で*wesa*が選ばれた。

1659) **te thanke** : 「神の氣に入るように」の意で、「感謝のために」ではない。118行、508行を参照。

1660) **ôdarhuuedar** : 代名詞 **ôdar-hwedar** 「ふたつのうちのひとつ」。**ên** : 「一者」という数詞で強勢を持つ。

1662) **gornot** : 805行に既出の *swv. gornon/gnornon* 「嘆き悲しむ」の命令法、2人称複数。
gegaruuui : *stn. gi-garwi/gi-gerwi/garwi* 「衣服」の単数対格。273行の *garu*, 595行の *garuwian* などと同系で、原義はおそらく「暖かく準備したもの」。

1663) **mornont** : 721行に既出の *swv. mornian/mornon* 「気づかう、思い悩む」(英 *to mourn*) の命令法、2人称複数。C写本は正しく *mornot* となっている。**an morgan** : 「明日」。原義は「朝に」だが、「次の朝に」を経て既に現代独の副詞 *morgen* (元来は単数与格形) や英 *tomorrow* の意味を得ている。

1664) **etan** : *stv. (V)* 「食べる」(英 *to eat*, 独 *essen*) 印欧祖語 **ed-* 「嘔む、食べる」に由来し、ラテン語 *edere* などと同系。**drinkan** : *stv. (III-1)* 「飲む」(英 *to drink*, 独 *trinken*)。ゴート語を初めとして全ゲルマン語に登場するが、語源未詳。**an hebban** : *an* は副詞。英 *on*, 独 *hinan*, *hinauf* などに対応。**hebban** と結んで「身につける」の意(独 *anhaben*)。

1666) **huues** : 疑問詞 *huuat* の属格。*bithurban* は属格目的語をとる (1558行に既出)。
thea...thea : 英 *those who*, 独 *diejenigen, die*。

1667) **frôhan** : *frô* の属格。**huuat** : 間投詞。556行にも登場。現代の低独語でも *wat!* をよく用いる。

1668) **undaruuitan** : 過去現在動詞 *undarwitan* 「わかる」の不定形。アクセントは *-witan* にもある。**thea** : = *fuglos*。

1669) **fedarhamun** : *swm. fedar-hamo* 「羽衣」の複数与格。*fedar* (独 *Feder*, 英 *feather*) は印欧祖語 **pet-* 「飛ぶ」に由来し、ラテン語 *penna* 「羽、羽ペン」とも同系。*hamo* 「衣服」の原義は「包むもの」で、独 *Hemd*, 仏 *chemise, camisole* などと同系。独 *Leichnam* 「死体」が古低独では *lik-hamo* であったことについては、1488行 *lichâmon* の註を参照。古英語に *federhama* は頻出するので、その影響下の造語であろう。*faran an fedarhamon* は「飛ぶ」の詩的頭韻成句と言ってもよく、5798行にも登場する。*fedar-hamo* が複数形で用いられるのは、翼が2枚であることから当然である。*Tatian* は羅 *volatilia caeli* 「空飛ぶもの」を *himiles fugala* 「空の鳥」と素朴に直訳している。これに対し、この「羽衣」という表現は、聴衆にゲルマン神話のヴァルキューレたちや、あるいは名人鍛冶ヴィーラントをめぐる羽衣伝説を思い起こさせる詩的効果を持っていただろう。

1672) **umbi** : 「…の故に、…をめぐって」。**uurti** : *stf. wurti* 「植物、草花、ハーブ；根」(独 *Wurz, Wurzel*, 英 *wort*) の複数主格。ラテン原文の *lilia agri* 「野の百合」を『ヘーリアント』の詩人は、この箇所 *wurt* と 1681行の *lilli* とに分けて頭韻詩を紡ぎ出している。

1673) **fagaro** : *adv.* 「見事に」。**gefratohot** : *swv.* fratahon 「飾る」の過去分詞、受動。
380 行の frataha 「装身具、宝石」と同源であるが語源未詳。

1674) **geblôid** : *swv.* blôian 「開花する」(独[auf]blühen, 英 to blow)の過去分詞。これも
1672 行の sint と結ぶが、受動ではなく現在完了、印欧祖語 *bhel- 「ふくらむ」に由来し、ラテン
語 flōs 「花」、英 flower, 独 Blume, Blüte, Ball, 英 bloom, blossom, ball などと同系である。

1675) **Salomon** : ザクセン人聴衆にはさしあたりおそらくこの箇所のみで、富んだ古代の大
王として始めて有名になった名であろう。

1676) **mêdomhordas** : 1643 行に既出。mêst と結ぶ属格。**thero the** : therō は mêst を
内容的に複数として受ける指示代名詞複数属格(部分属格)、the は無変化の関係代名詞(対格)。
「ひとりの人間が所有しうる限りの(最大量)」ほどの意。**êhti** : 過去現在動詞 êgan の接続法過
去 3 人称単数。

1677) **uuelono** : やはり前行 mêst と結ぶ複数属格。**geuunnan** : gi-winnan の過去分詞。
1675 行 habda の対格目的語を修飾する : 「…を獲得して所有している」。**cust** : *stf.* 「選択
(権)」の単数対格。*stv.* kiošan(英 to choose, 独[雅]kiesen, kûren)から作られた名詞。「すべての
もののからの選択」から「選りぬいた最善のもの」という意味が生じ、ここはその例。

1678) **an is libe** : 「その生涯において」。

1679) **auuinnan** : =winnan。 **sô** : 関係代名詞。

1680) **gegariuuit** : garuwian (595 行に初出)の過去分詞。

1681) **lilli** : *stm.* 「百合」(独 Lilie, 英 lily)。ラテン語 lilium の複数形 lilia から。古英語、古
ノルド後では女性、古ザクセン語では男性、古高独語では男女に揺れている。北の民族であるゲ
ルマン族にはあまりなじみのない植物だったが、改宗とともにマリアおよびイエスのシンボルと
して知られるようになった。**blômon** : *swm.* blômo 「草花」(独 Blume, 英 bloom)の単数具
格(mid は具格支配)。語源については 1674 行 blôian の註を参照。**ina** : =lilli。 **uuâdit** :
swv. wâdian 「装う、衣服を着せる」。379 行 wâdi, 1645 行 giwâdi の関連語。

1682) **Mêr** : 名詞的用法 : 「主にとってはこの勇士たちの一族の方がより大きいものである」。
umbi は「…に関して」。

★ このあたりかなり忠実に「マタイ」6章30節に従っているのだが、しかし「ああ信仰薄き
者たちは」(quanto magis vos modicae fidei?)は全然取り入れていない。やはりここでも、誇り高
い貴族層が中心の聴衆に対する詩人の一種の遠慮が働いているのではなからうか。

1685) **râdan** : *stv.*(Ⅶ-1)「助言する、援助する」(独 raten) 属格目的語とともに「…につい
て配慮する」の意。

★ 1684 - 1685 行までは「マタイ」6章31節の衣服に関する部分のみの再説であり、飲食に関
する部分は詩人によって完全に無視されている。「主の祈り」において「パン」を避けたのと同様
に、貴族聴衆にあまりに「いやしい」と思われることを避けたのだと思われる。更に、同じく

「マタイ」の32節に対応する1686－1687行において、原文冒頭にある「これらのものはみな異邦人が切に求めているものである」という一文も、詩人はまったく取り入れていない。異邦人に対するこのような「差別発言」を誇り高いザクセン聴衆に聞かせてはかえって伝道の妨けとなると考慮したのであろう。

1687) **gerot** : *siwv. geron* 「欲する」（独 *begehren*, 英 *to yearn*）の命令法2人称複数。属格目的語をとる。独 *gern(e)* も同根。 **duat** : 命令法。 **aftar them is gōdun uuercun** : 「神の良きわざに従って行動せよ」: *them*…*werkun* は複数数格。

1688) **rōmod** : 1554行に既出。属格目的語をとる。

1689) **gebon** : 1545行既出の弱変化動詞「贈物をする」の不定形 *mid* をともなっているので前行 *iu* を対格と解すべきだろう（独 *jn. mit et. beschenken*）。

〈第20歌章 山上の説教（続き）〉

あなたがたはどんな人に対しても いささかも不正な、
害になる裁きを下してはならない。 というのも本当の裁きが後に
その人自身に下されるからである。 そのとき、この世において
不正な裁きを他者に下した者にとって、 その行為は大きな悩み、
大きな苦痛となるであろう。 あなたがたのだれひとりとして、 1695
この地上の住かにおいて 物を売り買いするときに
偽りのはかりを用いることがあってはならない。 というのも、
人間のだれでもそうなるのであるが、 他の人に行なったように、
正にそのとおりに その人自身がなるのであるから。
たとえその人は 自分の罪など 1700
認めたくはないとしても。 それからこれも言うておこう、
いかなる場合に あなたがたが悪事の最大のものから、
大きな罪悪から身を守るべきかを： なぜあなたはわざわざ
あなたの兄弟である人をそしって、 彼の眉の下
目の中に麦わらが見えると言うのか、 そして自分の目の中の 1705
ずっと重い角材のことは 考えようとししないのか、
あの堅くて重い材木のことは。 まず最初に、どうしたら自分のが
取り除けるか考えるがよい。 そうすれば目前に光が輝き、

あなたの目は開かれるのだ。 その後であなたは初めて
 その肉親の目を、 彼の頭部にあるまなこを直し、 1710
 いやすことができるのである。 そうして人々のだれもが
 この中つ国において、 この世において
 自分こそが悪事をなしているという思いを 強く持つべきである、
 他の人の罪咎ばかりを心に掛けて、 その実本当は自分の方が
 もっと多くの悪しきわざを 行っていることを 1715
 棚にあげてはならない。 もし良い行いをしたければ、
 まずみずからを 罪惡から解きはなち、
 不義から脱け出すべきなのである。 そうすれば後に教えをもって
 人々を助けることができる。 みずからが清く、 罪を免れていることを
 確かめるのが先決なのだ。 豚の前にあなたがたの真珠や 1720
 さまざまの宝物を、 聖なる首飾りを、
 置くべきではない。 なぜなら豚はそれを汚物の中に踏みつけ、
 土砂の中でどろどろにするから。 豚には清らかな物や
 美しい宝物がわからないのだ。 この世の多くの人も同様で、
 あなたがたの聖なる言葉を聞こうとはせず、 神の教えに 1725
 従おうともしない。 彼らは良きことの何たるかを知らず、
 空虚な言葉や 役にも立たぬ物事の方が、
 彼らにとっては 大いなる神の御わざや御意志よりも
 はるかに好ましいものなのだ。 このような人々はみずからの心中で
 考え、 学び、 そして実行したいと思わぬ限り、 あなたがたの聖なる言葉を 1730
 聞くにあたいしない者たちである。 彼らには何ひとつ教えを説いては
 ならぬ。 真実の言葉を信じようとしなない人々に係わって
 神の御言葉と あなたがたの言葉の多くを無駄にしないためである。
 それからまたあなたがたは、 この地を旅してまわるとき、
 人々とまじわる場合には たいそう賢明に身を処し、そして気をつけねはならない。 1735
 あの嘘つきの教師たちが 言葉と行動の双方を使って
 あなたがたをたぶらかさないように。 彼らはすばらしい衣装で
 美しい財宝を身につけて来るが、 邪惡な思いを抱いているのである。
 彼らがやって来るのを見れば、 すぐそれとわかる。
 彼らは賢い言葉を語るのだが、 彼らの働きも、 また考えることも 1740

何の役にも立ちはない。 というのも、あなたがたも承知のように、
 茨にはぶどうが実るはずがなく、 何らかの良きものが、
 見事な果実が実ることはないのである。 また勇士たちが茨の茂みで
 いちじくを収穫することもありえない。 よく理解できるであろうが、
 この地上に生えている悪い木が 良い実を与えてくれることはなく、 1745
 また、良い木が人の子たちに 苦い生りものをもたらすことは、
 神様がなさるはずがないことである。 そんなことはなく、
 どんな木からも、 その根の部分から生い育つまの
 そんな実がこの世では 成るものなのだ、
 見事な実であれ苦い実であれ。 これは胸中の思いというものを、 1750
 多くの人の心の中というものを 指し示してくれる。
 つまり、どんなもののふであれ、 自分の口でみずから示し、
 伝えてしまうものなのだ、 何であれ思っていることを、
 心に抱く思いを。 そのどれひとつとして隠すことはできない。
 悪しき人からは 邪悪な計算づくが、 1755
 苦々しい不正な言葉が、 彼の胸にあるままに、
 心のまわりに結ばれているままに出るのである。 いつでも彼は考えを、
 思いを自分の言葉で知らせてしまい、 行動はそれに続くものなのだ。
 同じように、良き人からは 賢明な答えが、彼の叡智によって
 賢明に返ってくるものだ。 彼はいつもそれを自分の言葉を用いて、 1760
 自分の口を使って、 心に抱いているままに、
 彼の心の秘宝を話すものなのだ。 彼の口から神聖なる教えが、
 本当に喜ばしい言葉が現われ出て、 その後で彼の働きが
 人々のために成就し、 多くのもののふたちの
 役に立つことになるのである。 これはすべてを支配する御方みずからが、 1765
 全能の神、 天の主君である御方が
 良き人々に許しておられることなのだ。 彼らといえども
 神のお助けがなければ、 言葉によっても働きによっても
 何ひとつとして良きことを この世で行なうことはできはせぬ。
 さればすべての人の子は、 ただかの御方おひとりの力を信ずべきである。 1770

〔福音書その他との対応〕 1691 - 1693 行は「マタイ」7章1節と2節、1695 - 1701 行は同2節の一部と自由補足。1703 - 1707 行は同3節と4節、1707 - 1711 行は同5節。1711 - 1720 行は自由補足。1720 - 1724 行は同じく「マタイ」7章6節、1724 - 1734 行は会堂説教的意図による補足敷衍。1734 - 1741 行は7章15節にもとづくが、Hrabanus 註解によって大幅に変更。1741 - 1744 行は同7章16節、1744 - 1750 行は同17節と18節、1750 - 1754 行までは次節への「枕」的導入部、1754 - 1762 行は「ルカ」6章45節、1762 - 1770 行まではHrabanus 註解にもとづいた説教色濃厚な自由補足。

〔Tatian との対応〕 39章1節、4 - 7節、41章1 - 5節。

第20歌章 註解

1692) **adélean** : *swv.* 「(判決として) 与える」。1436 行既出の法律用語。 **dôm** : *stm.* 「裁き、判決」(英 *doom*)。語源などは490 行註を参照。

1693) **thar** : 関係副詞 (独 *wo*, 英 *there*) : 「そしてそこにおいては」。 **it** : 主格。
=unrehtes wiht, derbies adélean。

1694) **them** : 後半行の関係代名詞と結ぶ指示代名詞。 **hîr** : 前行の *thar* に対して「この世において」。

1695) **that** : 1697 行の接続詞 *that* 以下を先取りする指示代名詞中性単数対格。 **dua** : *iuwar ênig* を主語とする接続法現在 (要求)。

1696) **gardon** : *gard* の複数与格。577 行註で述べたように「囲いをした家屋敷」が原義であるが、ここでは比喩的に「この世」ほどの意。 **geldes ethho côpes** : 「支払いや買物の際に」。属格の副詞的用法。 *stm.* *kôp* 「買うこと、買物」(独 *Kauf*) の語源は1191 行の *kôp-stedi* の註を参照。

1697) **gimet** : *stn.* *gi-met* 「尺度、ます目」(独 *Maß*) の単数対格。印欧祖語 **med-* 「はかる」に由来し、独 *messen*, 英 *to measure* と同系。

1698) **mênful** : *adj.* *mên-ful* 「不正の」。主語 *hi* につく主格補語。 **môtean** : *swv.* *môtian* 「(与格とともに) …に出会う；生ずる」(英 *to meet*) の不定形。ゴート語、古英語、古ザクセン語、古ノルド語などに見られるが、高地ドイツ語には伝わらない。

1699) **sulik so A, so B** : 「Aであるように、そのようにBである」。

★ 「マタイ」7章2節「あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう」に相当する箇所、Tatian は忠実に *In themo mezze thie ir mezzet, ist iu gimezzan* としているのに反し、『ヘーリアント』の詩人は大胆に日常的支払いの場の不正ますに移し変えている。卑俗化ではあるが聴衆にはわかりやすい。

1702) **huuar** : 「どんなところで、いかなる点について」。 **uuardon** : *swv.* (与格再帰代名詞と対格目的語をともなつて) 「あることに用心する、気をつける」(独 *warten*, 英 *to ward, to*

guard)。300行註参照。 **uufteo mēsta** : 「罪の(中性複数属格)最大のものを」。mēstaは *adj.* 弱変化中性単数対格の名詞的用法。

1703) **te huui** : 「なに故に」、555行に既出。 **besprekan** : *stv.*(IV) bi-sprekan 「1 非難する、2 語る」。①の用法の方が多く、これは古英語 *besprecan*、古高独語 *bisprehan* についても同様。

1704) **brâhon** : *swf.* brâha/brâwa 「まゆ(毛)」(独 *Braue*, 英 *brow*) の複数与格。ゴート語 *brafþ augins* 「まばたき」が初出例で、おそらく印欧祖語 **bherek-* 「輝く」に由来する。この箇所 の原拠である「マタイ」7章3節では単に「兄弟の目のちり」(*festucam in oculo fratris*) であるが、頭韻の必要上 *brâha* を取り入れたもの。 **gesehas** : 接続法現在。

1705) **halm** : *stm.* 「麦わら」(独 *Halm*, 英 *haulm*) の単数対格。印欧祖形は **kolamos*。

1706) **suâran** : *swâran*。 **balcon** : *swm.* balko 「角材、梁」(独 *Balken*, 英 *balk*) の単数対格。共通ゲルマン語。ずっと後になって仏語経由でイタリア語から入った独 *Balkon*, 英 *balcony* 「バルコニー」も同語源で「梁作りの露台」を表わし、北伊に定住したランゴバルト族のゲルマン語に由来する。 **siuni** : 「眼」。1479行と同じく頭韻の必要上選ばれた。

1707) **trio** : *stn.* treo 「材木、梁」(英 *tree*) の単数対格。ゴート語 *triu* 以来多くのゲルマン語に見られる語で、「オーク類の堅い樹木」が原義らしい。高地ドイツ語には登場しないが、ただし独 *treu* 「誠実な」、*Treue* 「誠実さ」、*Trost* 「慰め」、*trauen* 「信頼する」などは元来「(オークの) 樹のように堅くしっかりしていること」に由来するという説もある(英 *true*, *truth* などとも同様ということになる)。 **hebig** : *adj.* 「重い」(英 *heavy*)。 「持ち上げる」の *stv.*(VI) *hebbian* (独 *heben*, 英 *to heave*) と同系(24行 *a-hebbian* 註参照) **an thinan hugi fallan** : 独 *auf den Gedanken fallen* 「思いつく」と同じ *fallen* の用法。

1708) **thana** : = 汝自身の目のうつばり。 **alôseas** : 接続法現在。

1709) **geoponot** : *swv.* opanon/oponon 「開ける」(英 *to open*, 独 *öffnen*) の過去分詞。

1710) **suâses** : *adj.* swâs 「身内の、親族の」の語源は202行註参照。 **gisiun** : = *siun gebôtean* : = *bôtian* (独 *verbessern*, *büßen*)。877行に既出。

★ このあたりの原文「マタイ」7章5節は「偽善者よ」(*Hypocrita*) で始まっているが、第18歌章においてと同じく(1578行の★註) 詩人は採用しない。貴族聴衆にはふさわしからぬからだろう。

1711) **sô mag that** : **that** は指示代名詞で、1713行の接続詞 **that** 以下を先取りする主語。**mag** は当為のニュアンスを帯び、*skal* に近い珍しい例。もちろん願望の意とも解し得る。

1713) **uuammas** : 部分属格。

1714) **ahtogea** : *swv.* ahton/ahtogean 「気にかかる、留意する」(独 *achten*) の接続法現在3人称単数。印欧祖語 **ok-* 「思慮する」に由来。ゴート語以下共ゲルマン的単語であるが、英語だけは古英語 *eahtian* 以降消滅した。

1715) **endi habad** … : 1713行の **that** に続く。

1717) **ina** : = 再帰。 **atômeon** : 「赦す」(人の対格、物の属格をとる)。1016行に初出。

1718) **leduuerco** : *stn.* led-werk 「悪事」の複数属格。C²本では *lethero uuerco*。 **lôson** : *swv.* (人の対格と物の属格をとって) 「…から…を開放する」(英 *to loosen*, 独 *lösen*)。 **sīdor** … **sīdor** … : 最初の **sīdor** は副詞「その後に」。1719行の **sīdor** は従属接続詞「…した後になって」。

1720) **sīcoran** : *adj.* sīkor (属格目的語をともなって) 「…から免れた」(独 *sicher*, 英 *secure*) の男性単数対格。前行 **hluttran** とともに **ina** 「自分自身を」の補語。語源については892行 **sīkoron** の註を参照。

★ 1710 - 1720 行までは詩人の自由補足。前節内容を一般的に敷衍して、「目の中のうつばり」という一見奇抜な比喻を聴衆にわかりやすいものになっている。

suīnum : *stn.* swin 「豚」(独 *Schwein*, 英 *swine*) の複数与格。語源のはっきりしないが、鳴き声の擬音からか? ラテン語 *sūs*, 独 *Sau*, 英 *sow* など同根。 **teforan** : *adv.* te-foran (与格名詞の後置詞として) 「…の前方に」。

1721) **meregriton** : *swf.* merigrita 「真珠」の複数対格。ギリシャ語 *margarīēs*, ラテン語 *margarita* からの古い借入語。ゴート語 *marikreitus* の頃から既に、前半部は「海、湖」(古ザクセン語 *meri*, 古英語 *mere*)、後半部は「砂粒」(独 *Grieß*, 英 *grit*) であると理解されていたらしい(実はオリエント由来のこの語源は未詳)。英独とも後にロマンス語由来の *pearl*, *Perle* によってとってかわられた。なお、人名、植物名の「マーガレット」、食品「マーガリン」などもみな同系語である。 **makon** : 本来の意味を持たず、**teforan** という方向の副詞によって「置く」という意味が理解される代動詞。もちろん頭韻の必要によって使用されているのである。 **mēdmo** : *mēdom* の複数属格。次の **gistriuni** と結ぶ。 **gistriuni** : *stn.* 「財宝、所有物」。古高独語 *gistriuni*, 古英語 *strēon* があり、「獲得、所有物、財産」を示す。ラテン語 *struō* 「積みあげる、築く」と同根の可能性がある。『ヘーリアント』には過去分詞 *gistriunīd* 「飾られた」も登場し(5666行)、単なる「所有物」ではなく、宝石や貴金属の類に意味が固定していたらしい。

1722) **halsmeni** : *stn.* hals-meni 「首飾り」。 *hals* は印欧祖語 **ksuel-* 「まわる」に由来し、「頭の回転する部分」が原義。ラテン語 *collus* 「首」やフランス語 *collier* 「首飾り」も同系。ゴート語 *hals* をはじめとして全ゲルマン語に見られる。後半の *meni* 「首飾り」は独立しては『ヘーリアント』には登場しないが、古英語 *mene*, 古ノルド語 *men*, 古高独語 *menni* などがあり、またラテン語 *monile* 「首飾り」やスラヴ語、ケルト語の類似例からも古い印欧語であることがわかる。すなわち「首、首すじ」を意味する **mono-* に、または *io-* 派生語尾がついて「首飾り」の意が生じたもの。**mono* の原義の方は西ゲルマン語では「動物の首すじ→動物の首すじの毛→たてかみ」と変化して、独 *Mähne*, 英 *mane* に残っている。 *hals-meni* はしたがって同義反復に近いことになる。

★ 「マタイ」7章6節ではまず「聖なるものを犬にやるな」とあるが、詩人はこれを無視する。古来狩猟や牧畜に、そしてペットとしても大きな役を果たしてきた犬(貴族層であればなおさら)をこの関連で言及しなかったのか? そして「マタイ」では単に「豚の前に真珠を投げては

なりません」とあるのを、「真珠や数々の宝物を、聖なる首飾りを…」とくどく訳しているのは、頭頸上の必要性を考慮してもなお興味深い。とりわけ *hêlag halsmeni* は、ケルト人やゲルマン人が一種のお守りとして身につけていたペンダントを想起させる。改宗期には、それまでお守りとして愛好された雷神 *Thor* の万能のハンマーが形の類似から十字架と見なされるようになり、十字架形のペンダントが普及する一因となった。『ヘーリアント』の作者は、おそらくこのような十字架ペンダントを念頭に置いているのであろう (Ilkow, 166 頁および Murphy の註 95 を参照)。

it : 形式上は中性単数の *gestiuni* および *halsmeni* を指すが、心理的には直前の *halsmeni* であろう。 **horu** : *stm./n.* 「ごみ、汚物」の単数対格。古英語 *horh*, 古ノルド語 *horr* 「鼻汁、ごみ」、古高独語 *horo* などもあるが語源未詳。 **spurnat** : 1372 行註を参照。

1723) **suluuiad** : *swv.* *sulwian/sulian* 「(塗りたくって) 汚す」の現在 3 人称複数。ゴート語 *bi-sauljan* の他に古英語、古高独語にも類語があり、印欧祖語 **seu-* 「汁気のある、湿った」に由来すると思われる。現代独語 *Sudel* 「汚水、不潔」、(be)*sudeln* 「グチャグチャ汚くする」も同根。 **sûbreas** : *adj.* *sûbri* 「清潔な」(独 *sauber*) の名詞化、中性単数属格。俗ラテン語由来のこの語の語源については 334 行 *sûbro* の註を参照。属格は次の *geskêd* (653 行に既出) との関連で。

1724) **fagaroro fratoho** : 複数属格。

1727) **lâri** : *adj.* 「空虚な」(独 *leer*) の中性複数主格。「拾い集める」意の *lesen* と同根で、「収穫が終わって、貧民に落穂拾いが許されるようになった畑」が原義。農業用語だったが、この時期には英独ともに (古英語 *gelære*, 古高独語 *lari*) 一般的に用いられていた。

1728) **umbitharbi** : *adj.* *um-bi-tharbi* 「無益の」の複数主格。*um-* は次の *bi* のために唇音化した否定接頭辞 *un-*。 *bi-tharbi* は 525 行 *thurftig* の項でも触れたが、「必要性、有用性」を意味する *stf. thurft* からの派生 *adj.* で「有用な」の意。

1729) **than** : 次行の *ef*…以下を先取りして「もし…ならば、それならば」。

1732) **managu** : 中性複数主格対格にも時々語尾 *-a* や *-e* がつく。しかし *-u* は対格のみ。

1733) **gilôbean tô / uuâroro uuordo** : *gilôbian* が属格目的語と *adv. to* をともなっている例。

★ 1724 - 1734 行までは福音書にはない補足であり、豚の比喩を聴衆にわかりやすく解説しようという説教的部分である。

1735) **listiun** : *adv.* として用いられた複数与格：「賢明に；ひそかに」。315 行註を参照。
aftar : 「…を通して」。

1736) **luggeon** : *adj.* *luggi* 「嘘つきの」の弱変化男性複数主格。1037 行既出の *stf. lugina* (独 *Lüge*, 英 *lie*) の *adj.* である。次の *lêron* を修飾するが、その間に *ne mugin* が来ているので「あの嘘つきたち」のように名詞的と考えていいだろう。 **lêron** : *swm.* *lêro/lêreo* 「教師」(独 *Lehrer*) の複数主格。ラテン原文では *propheti*。

1738) **fêcnan** : *adj.* *fêkni* 「邪悪な」の男性単数対格。1228 行に *fêgni* として既出。

1740) **dugin** : 1371 行に既出の過去現在動詞 *dugan* (独 *taugen*) の接続法現在、3 人称複数。

1741) **getháhti** : *stf. gi-tháft* 「思考；信仰」の複数主格。 **thornium** : *stm.* 「茨 (の茂み)」 (英 *thorn*, 独 *Dorn*) の複数与格

1742) **uuinberi** : *stn. win-beri* 「ぶどう (の実)」の複数主格。 *win* については 127 行および 229 行註を参照。 *beri* (独 *Beere*, 英 *berry*) は古英語 *b(e)asu* 「緋色の」と同根と思われ、「赤紫色の果実」が原義かと推測されているが、異説もある (「茂みに生じる実」など)。ゴート語 *wein-basi* 以来の古い合成語であるが、近代英・独語では *grape*, *Trauben* にとってかわられ、英 *wine-berry* は木苺の一種、独 *Wein-beere* は「干しぶどう」を表す南独方言となっている。
uuelon : *swm. welo* 「良きもの；富」の単数属格。 *eowiht* と結ぶ。

1743) **fruchte** : *stm. frucht* 「果実」 (独 *Frucht*, 英 *fruit*) の複数属格。ラテン語 *fructus* に由来し、ローマの優れた農耕・園芸技術をその用語とともに早く採用した中・低ライン地方から全ゲルマン語圏に広まった語彙のひとつ。純粋な古ザクセン語では *was-tom* (独 *Wachstum*) であるべきであり、実際数行後 (1746) にはこの語が使われている。ライン地方以外ではこの系統の外来語は定着が遅く、たとえば *St. Gallen* の学僧 *Notker* (950 年頃～1022 年) は古高独語 *frucht* を好まないで古来の *wuocher* (独 *Wucher* < *wachsen*) を用いている。 **figun** : *swf. figa* 「いちじく」 (独 *Feige*, 英 *fig*) の複数対格。ラテン語 *figus* がプロヴァンス語経由で入ったもの。ゲルマン語の大多数はこの系統の語を用いているが、ゴート語のみは *smakka* という語源不詳の訳語になっている (独 *schmecken* と関連させて「美味な果実」の意とする説もある)。9 世紀前半には (主に乾燥果物として) ゲルマン族にもすっかりポピュラーになっていたと思われる。

1744) **hiopon** : *swm. hiopo* 「茨の茂み」の複数与格。「野ばらの実」を意味する南独 *Hiefe*, 英 *hip* に残るが、語源未詳

★ 1734 行から 1744 行までは「マタイ」の 7 章 15 節と 16 節に対応するが、(ほぼ直訳している *Tatian* とちがって) 15 節では変更が大きい。そもそも「にせ預言者」*falsus prophet* は『ヘーリアント』では *luggi lero* 「うそつき教師」と、わかりやすく言い換えられている。次に「彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です」という原文が、宝石で飾られた美々しい衣装と邪悪な心という対比に置きかえられている。頭韻技術上の問題もあったかもしれないし、あるいは聴衆の大多数がザクセン貴族なので、素朴な牧畜上の比喻よりこちらの方がより多くアピールすると作者が考えたからかもしれない。しかし直接的には、*Hrabanus* の註解書の影響が大きく、とりわけ補足的な箇所はそうである。

undarhuggean : *swv. undar-huggian* 「理解する」。「ある事柄の中に没入してじっくり思いをめぐらす」のが原義。ラテン語 **inter-legere* 「物事の中から選び集める」 > *intellegere* 「理解する」(ここから *intellect*, *intelligence* などが生じた) と発想の近い語構成で、英 to *understand* などと同様に理解できる。『ヘーリアント』には他に *undar-gripan*, *undar-thenkian*, *undar-witan* などの *undar-*を用いた類似表現が見られる。

1745) **bôm** : *stm.* 「樹木」 (独 *Baum*, ♀ 英 *beam* 「梁；光線、ビーム」) の単数主格。ゴート

語 *bagms* 以来の共ゲルマン単語であるが、語源未詳。独 *biegan* 「曲る」と同根で「風の中で曲る樹木」が原義か？ 古い段階では「樹木」だけでなく、「木材」、「木の棒」や「十字架」をも表わしたが、独では前者のみに、英では後者のみに意味が限定されて行った。英 *beam* の「光線」の意味は、「(光の) 棒」という比喻の形で既に古英語に登場している。

1746) **uuastum** : *stm. wastom* 「(集合的に) 果実」の単数対格 「成長」の意味 (独 *Wachstum*) では既に962行に登場しており、語源などはその註を参照。ちょうど日本語の「生りもの」と同発想の語で、したがって果物に限定されず「作物、植物」にも用いられた (2506行) のは、古英語、古高独語も同様。蛇足ながら現代独 *Obst* は **ob*+*Essen* という構造で「主食につけ加える(*ob*) 食物 (*Essen*)、副食類」が原義。豪勢な食事が貴族階級では可能になったカロリング期に成立した語。当初は主に豆類を指したが、南欧由来の果実が普及するとともに「果実」に意味が固定したもの。但し『ヘーリアント』には登場しない。 **gescôp** : < *gi-skepian* (独 *schaffen, schöpfen*, 英 *to shape*) : 「また神は *that* 以下のことも創造はされなかった」。

1747) **barnun** : 複数与格。

1748) **bâri** : < *beran* の接続法過去。 **bittres** : *adj. bittar* 「苦い」 (英、独 *bitter*) の中性単数風格。「苦いもの」という名詞的用法であり、それが部分風格として *wiht* と結んだもの：「何か苦いものを；いささかの苦いものを」。現代独 *etwas Bitteres* も同じ語構成である。印欧祖語 **bheid-*「裂く、切る」に由来し、独 *beißen*, 英 *to bite* 「噛む」と同源。

1749) **so** : 前半行の *sulik* と結ぶ一種の関係代名詞対格で *wastom* を指す。この文の主語は *gehwilik bâm im* : 関係文主語 *gehwilik* の与格再帰代名詞。 **gedregid** : *stm. (VI) gi-dragan* (独 *tragen*) の3人称単数現在。主語は *gehwilik (bôm)* **uurteon** : 「根」。1672行既出の *wurt* の複数与格。1672行と1679行は「植物、草花」であったが、ここは明らかに「根」である。

1750) **berht, bittar** : 前行 *wastom* を補足説明する *adj.* なので、男性単数主格。

★ 「マタイ」7章17節、18節では「良い」「悪い」(*bonus, malus*) でしかないが、『ヘーリアント』詩人は「輝くように」見事な」と「苦い」という頭韻を踏む対応語に変えている。詩人の苦心がうかがえる。

That : 「このことは」。いささか唐突だが前文の内容を受け、*mênid* の主語。但しM写本では *Than* という副詞になっていて、解釈上問題のある箇所。 **mênid** : 「…が…だということを指し示す；意味する」。対格目的語と従属節をとまう。対格目的語 *breosthugi* … *môdsebon* と *hwô* … 以下とをまとめて「これはすなわち胸の思いとは…するものであることを示唆する」ほどの意。 **breosthugi** : *stm. briost-hugi* 「胸の思い」の単数対格。(但しM写本に従えば主格)。胸部に思考の源を見るのは非科学的ではあるが、ほとんど全人類に共通のイメージと言うことができよう。単なる頭韻便宜上の造語でないことは当然である。1754行の *hugi umbi is herte* も同発想。次行 *môdsebon* はこの *breosthugi* の *Variation*。

1754) **thes** : *eowiht* と結んで一体をなす風格。

1755) **inuuidrâdos** : *stm.* inwid-râd 「邪悪な思い、計算ずく；悪い提言」の複数主格。
inwidは1468行に、râd「配慮、計算、助言」は226行に既出。

1756) **balusprâca** : *stf.* balu-sprâka 「悪しき言葉」の複数主格。

1757) **geheftid** : balusprâcaの補語たる過去分詞。 **cûdid** : 主語のhi (=the ubila man) を補って考える。

1760) **that** : 結果的接続詞。

1762) **hord** : ここでは「心中深く秘めた貴い思い」と解してよいが、「おい隠されたもの、秘宝」というこの語の原義はよく保存されている（1643行註を参照）。この箇所 of the treasure 「ルカ」6章45節に「良い心の倉、悪い倉」de bono thesauro, de maloとあり、そのthesaurusをhordで表わそうとしたもの。 **Thanan** : 「口から」。

1765) **uuerdan te uuilleon** : 「利益となる、役に立つ」1124行に類例は既出。 **it** : 上述の「良き人の口から発せられる言葉が多くの人を助ける」ということ。

1770) **is ênes** : he ênの属格。

★ 1762行から終わりまではHrabanus註解などを中心にした補足文。読まれる文献たるTatianとは用途が本質的に異なっている『ヘーリアント』の、聴衆を目の前においた歌唱説教としての面目が躍如たる部分である。